

行貫事一

特252

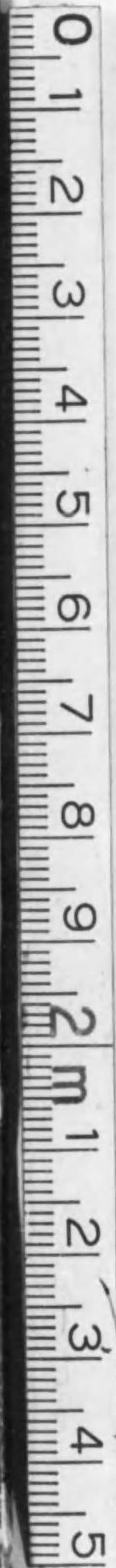
301

山下信義著



輯10第

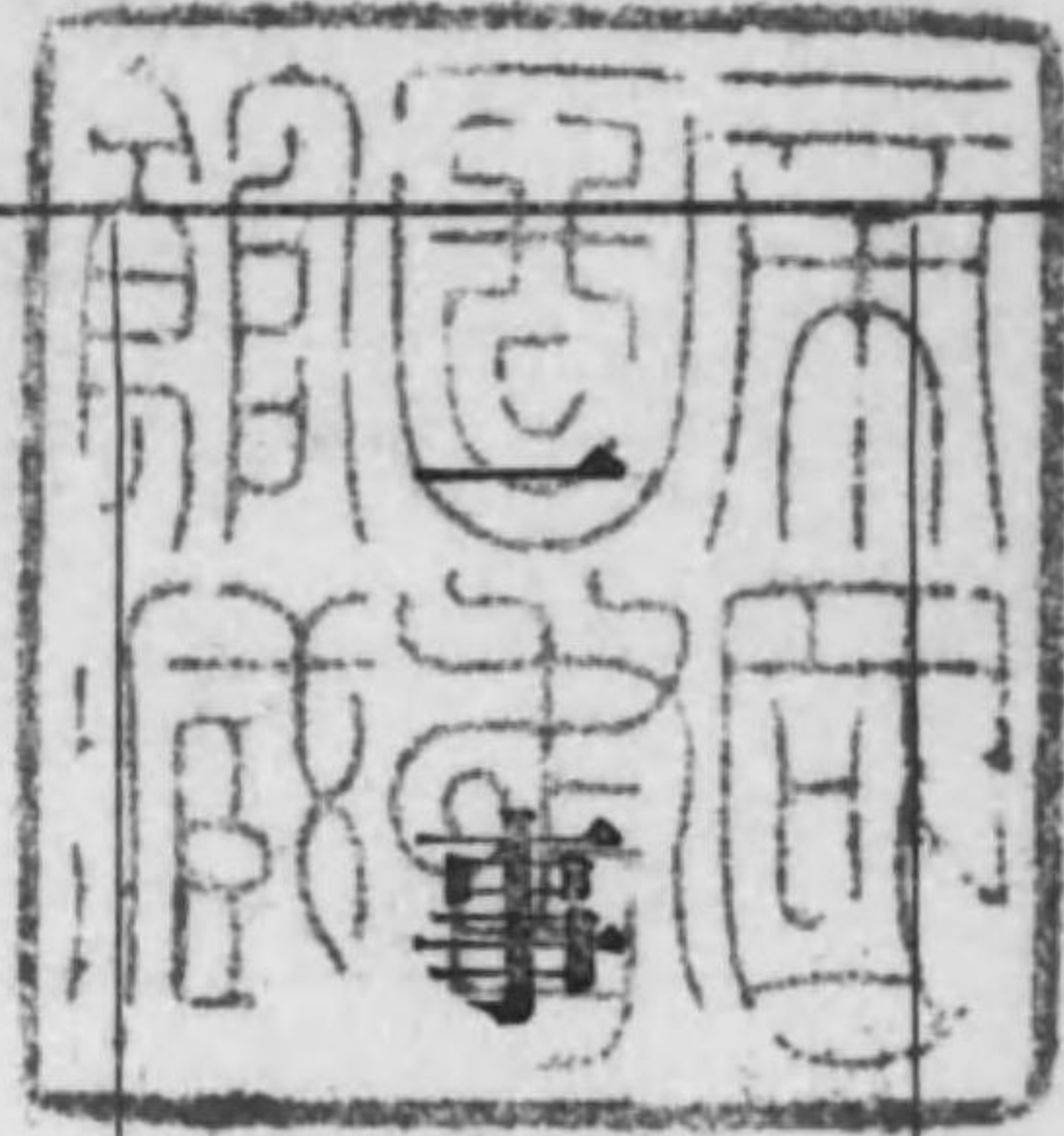
書叢活生興新



始



持252
301



新興生活叢書・第十輯

貫行

山下信義著

財團法人 佐藤新興生活館版



一事貫行

目次

序章	一事貫行の賦	(一)
第一章	強き意志の力	(九)
第二章	偉大なる人間力	(二八)
第三章	現代文明と一事貫行	(三六)
第四章	日本國民性と一事貫行	(三四)
第五章	強意を造る最良法	(四〇)
第六章	徹底の境地と一事貫行	(四九)
第七章	一事貫行の百例	(六一)
第八章	一事貫行の人々	(七〇)
第九章	着手の箇所	(七九)

一 事 貫 行

一事貫行の賦

山下信義

一事貫行の劍けん 鞘さやを拂はらへば忠ちゆうとなり義ぎとなり、以もつて克よくく國體こくたいを擁護ようごす。
 一事貫行の璽せ 敍じを執とれば孝かうとなり徳とくとなり、以もつて克よくく一身いしんを護持ごぢす。
 一事貫行の鏡きやう 篋けつを開ひらけば智ちとなり術じゆつとなり、以もつて克よくく天地てんちを照灼せうしやくす。
 維いは是これ臣子しんし影向えいかうの三寶さんぼう。國民こくみん子孫しそん嫡々てつてつ相承さうじやうの心器しんき。之これを藏かくするに一念いんせつ清淨せいじやうの宮殿みやうてんを以もつて
 し、之これを放はなつに治亂興廢ちらんきやうはいの間に於おてし、敢あて錯さくまらざること既に二千五百載にせんごひゃくさい。
 悠久きゆうきゆうなる哉建國けんこくの肇はつしゆ。天神てんしん一系いっけいを傳つたへて皇統かうたう天地てんちと共に榮さかえ、萬民ばんみん一誠いっせつを致いたして忠烈ちゆうれつ萬古ばんこ
 に徹とおす。

無邊なる哉一事の使用。買けば茲に建國の柱梁と時ち、敷けば長に國家經營の礎石と横たはる。

洪大なる哉貫行の威神力。一度揮へば山嶽を聳動し、二度叫べば湖海の波を肅鎮し、三度拂へば終に能く虚空を截て細斷すべし。

維れ是の偉力我に有り汝に有り。誰か亦泰山を抉んで北海を越ゆるを難しと爲すや。彼の先聖古賢の一行、綿々傳へ來りて水の如く地を潤し、今此の後學門子の一事は受けて法燈を天上に掲げ、將に渾沌を照破し靈さんとす。一志も亦壯ならずとせざらんや。

惟ふに親子の一血脈は、亦是れ天地の一元氣。身に現はれては肉となり體となり、胸に潜みては靈となり魂となる。維れ是の一身無價の家寶。維れ是の一靈天下の重器、一言も忽にすべけんや。一事も猥にすべけんや。

一水西に走れば西海の水となり、一山東に赴けば東天の山となる。是れ一貫の勢の集まる所。是れ一精の力の凝る所。其の大は學んで而して氣宇を養ふべく、其の高は仰ぎて而して

て向上の範とすべし。

井泉を求むるの工人あり。鑿々巖を穿つ一日僅に一寸。兀々倦まず鑿缺けて刃を損する亦一寸。鎚を執り刃を鍊へ再び試むること亦一寸。巖を撃ち刃を打ち精々止まず寸亦寸。日を重ね月を重ね根氣將に絶せんとする時、巖底乍ち聲あり豁然として鳴り、堅石自然に碎けて水天上に噴騰す。人若し此の喜びを得んと欲すれば、必ず其の苦を共にする事を忘るゝ勿れ。

産を興し富を積みたる賈人あり。嘗て寒水を涉り熱沙を踏み、朝に蠻雨の中に浴し、夕に瘴煙の下に伏し、頻死の厄中辛うじて許多の財寶を得て歸れり。後の此の富貴の褥に座せんと欲せば、前の其の忍難の慘憺をも管めざる可からず。

唯一事なり。唯一貫なり。地下一尺の水も先づ穿たずして何の渴をか醫さん。假令衣裡の寶珠たりとも、手を舉げて觸れざれば無きが如し。幸に汝と我と痴者ならざるに、何の怯懦をか之れ習はん。

卵を抱く鶏に見よ。食はず眠らず之を温む。今日若し一事も作すなく徒消し終らば、我

と汝と一日食はず一日眠らずと、誓ふも亦佳ならずや。
 是を蠶の小蟲に見よ。身長僅に三寸。食ふ所の桑葉は化して光絹となる。長さ千尺。然も
 堂々五尺の男兒、汝と我と食む所の物は何の食ぞ。誓む所の物は何の業ぞ。
 彼の錦繡は燦爛たり。然れども之れ一絲の織る所。彼の大業は嚇々たり。然れど之れ一事
 の合する所、然れば一絲を疎にせば終に錦繡無く、一事を輕んずれば、大業何れの日か成
 るの日あらんや。
 起てよ起てよ我が輩。汝の一事を貫行する所、其處に汝の天職は完うされ、國家委託の大
 任は果されん。起てよ起てよ我が輩。汝の一心の神龜を押開いて、汝の聖なる靈火を點する
 所、其處に法界の事象は輝き、天地の妙理は開顯されん。
 谷に働く樵夫等よ。將に堅樹を伐らんと欲すれば、須らく先づ汝の斧を砥ぐ事を怠る勿れ。
 海に漁る漁夫等よ。綸は水中に投ずるとも、波に隨つて上下するの勞を厭はざ、何の魚か尋
 ね來りて其の餌に着かん。

寧ろ巷に一事を求めて復ふとも、彼の昧者の無事睡眠に習ふ勿れ。寧ろ破屋に藥を打つと
 も、彼の富家の酒肉の亂座に歌ふ勿れ。
 良馬は鞭影に驚き走り、死馬は皮肉を破るとも走ること能はず。唯我と汝と相策勵し相擊
 節して起たば、貧家の今日も憂ふるに足らず。難村の現狀も亦直に救ふを得べし。
 渠成つて自ら水は到り、事成つて始めて自ら名は生ず。予輩の希望は前途にありと雖
 も、予輩の努力は現狀にあり。脚下にあり。
 憂慮を捨て、一事に就けよ。力を極めて一事を貫け。一箭力あらば、弦に應じ能く鐵兜を
 碎くにあらずや。一文誠あらば終に天下の輿論となりて、能く萬機の指針とならずや。一事
 を貫行せよ。唯一事を貫行せよ。僅に一句を練るが爲めに、雙淚滂沱たりし先師あり。唯半
 偈を得るが爲めに、軀肉と替へたる古佛あり。嗚呼文何ぞ血ならざらん。道何ぞ樂地に獲取
 されんや。
 退きて拙を守り、慎んで戒を保つ。敢て又惡しからずと雖も、爲す所必ず之を遂げ、行ふ

所必ず之を貫く、敢行の勇氣、突撃の精神、是れ我が海に國する者の氣象なり度量とせざるべからず。

往け往け。我等の天地は貫行の天地。我等の手足は力行の手足。向ふ所に勇邁の氣は揚り進む所に奮迅の力は生ず。

恐るゝ勿れ、舟を海中に放つ者。惑ふ勿れ、事を世間に行する者。波浪來りて鉞を叩けば、舟行を妨ぐるが如しと雖も、波量の多きは却て舟を浮ぶ所以。一難又一厄、波瀾狂湧の中に於て、我が眞力量を試みるは、素より男兒の痛快事。銳意して事を進むれば、障礙却て坦途と化さん。

怠る勿れ踏ふ勿れ。今日一事を處理し去つて、明日一事を成就し去らば、百事の翹集は即ち是れ百事の成就なり。

然なり百事の成就は一事の成就に始まり、一事の成就は唯其れ貫行にあるのみ。唯其れ貫行せよ。唯瞬前に、唯瞬後に。

唯此の瞬時のみ唯此の一瞬のみ。最初の瞬時にして、又實に最後の一瞬なり。知らずや彼の好機と天運とは、常に此の瞬間の日に乗じて、汝の面前を去來し止まざること。

見よ日は堂々たり。今海を上る。見よ日は正々たり。今天に冲す。見よ日は凛々たり。今地に没す。汝と我との一事を貫く、亦々然らずや然らざるや。

嗚呼此の一日再び來らず。嗚呼此の一生再び得難し。徒らに百事を追ふて疲勞を悔んか。一事を收めて悠々凱歌を奏せんか。

苦しむ者は一日を長しとして憂ひ、逸する者は一生を短しとして嘆く。是非の論議は彼等の爲すに任せよ、我と汝の期する所は、時劫の經に貫く一事一事の緯を以てし、直に生命の全機を捉へ一時一事の文を絡め、如實に、任運に、象徴し天造するにあり。壯大に、雄渾に、描出し鏤刻するにあり。永遠に、無窮に、編入し組織するにあり。

太初此の方、生命の戰日として闘はれざるなく、勇猛の戰士、往くとして勝を奏せざるなし。我が徒よ。進撃の叭喇亦嗚り、突貫の劍戟亦憂々として響く。

噫此の一戦、皇國の興廢繫り、噫此の一事、一身の存亡に關す。唯此の力行如何は、汝の榮辱の別るゝ所。唯此の貫行の有無は我が成否の決する所。唯此の一念にあり。唯此の刹那にあり。

學人よ業者よ。唯一事なり。唯一貫なり。一朝之を奉じ、一夕之を體して起たば、學何ぞ成らざらん。業何ぞ成らざらん。

老ひたる者よ。若き者よ。余等が一身は私の物にあらず。天地の物なり。國家の物なり。思へ天孫雲を履んで國土に天劍を樹てし以來、天恩は浩々たり。皇恩は孳々たり。加ふるに大道擁護の使命ありて、儼乎として無窮に懸れり。孝ならざれば爲す勿れ。忠ならざれば行ふ勿れ。

此の一事は即ち是れ祖先の遺風國體の精華。若し余等にして生を盡し族を擧げて、猶且之を貫くを得ざれば、更に之を子孫の心血に濺いで、持續生々必ず以て貫徹せしめん。

第一章 強き意志の力

一、人間の希望と現實

強くなりた、賢くなりた、偉くなりた、立派な仕事を仕遂げたい——と思はぬ人が世にあらうか。誰だつて、病者や貧乏人にはなりたくない。又、不徳な人間や、失敗者となることは厭であるにきまつてゐる。かゝることは、別に一人々々の人に就いて尋ねてみるまでもないことで、百人が百人、千人が千人、みな、その通りであるに違ひない。小は鉦力製のサーベルを下げた餓鬼大將の坊つちやんから、上は腰に梓の弓を張つた白髮の老人に至るまで、皆一様に、富強福徳を欲してゐ、立身出世を望んでゐ、徳望家や成功者になりたいと、朝から晩まで祈りぬいてゐるのである。

然しながら、實際、世の中の事實はどうなつてゐるかといふに、この希望、この目的の成就せ

られた者が果して幾人あるであらうか。打ち見たところ、成功者、幸福者、強者、徳者は、はなはだ少くして、失意の人、蹉跎の人の、あまりにも多いのに驚かされる。一體これは、どうしたことであらう。まゝにならぬは浮世の常かは知らないが、かくては、餘りにも情ないお互の人生と言はねばならぬ。運乎、命乎、それとも努力の足らざるが爲めか、能力の及ばざる爲めか、それもく人間の希望は、夢、幻に過ぎないのであるか、はた亦、天、之を與へざるのか、之を得る能はざるのか、一體それは、どちらなのであらう。

二、人間の實

富も實である、積みたいと思ふ。智能も實である、欲しいと思ふ。健康も實である、保ちたいと思ふ。徳望も實である、得たいと思ふ。強き意志も實である、持ちたいと思ふ。然しながら、その最後に數へた強意、すなはち強き意志には、上に述べたところの、富や、智識や、才能や、健康や、徳望と違ふ所がある。それは何であるかと云ふと、この強き意志、即ち不屈不撓の、七度轉んでも八度起き上るところの、鐵の如き意志こそは、強、善、能、富等の、あらゆる實の持

主だといふことである。之さへあれば、欲する萬事が持ち來され、若し之がなくなれば、數多き中のたゞの一つをも得ることが出來ないといふことである。全體か零か(All or nothing)は、實に強意の有無によつて定まるのである。

我々は、思ふて人を愛することも出來るし、欲して財を積むことも出來る。又、學んで知を開き、習ふて才能を高め、願ふて有徳の人となることも出來やう。しかし、たとひ生れつき、どれほどの長所を持つてゐる人でも、欲せざる人、學ばざる人、習はざる人、願はざる人は、如何ともする事が出來難い。たゞ強き意志のある所にのみすべての事が成就する。強意はあらゆる實の王である。強意のある所には天祐も自然に與へられる。實に強き意志こそは、あらゆる物を生み出す實であり、造り出すところの親であり、すべてを所有し支配する王者である。

三、意志とは何か

意志とは何であるか、それは行ふ力である。爲す力である。耐える力である。續ける力である。勤勞。努力。

斷行。實行。
繼續。忍耐。
克己。奮闘。

右の如き文字にして、強き意志のはたらきが含まれてゐないものは一つも無いのである。若し勤勞の中から強意を取り去つたならばあとに何が残るであらうか、そこには實に勤勞の意味すらもなくなつてしまふであらう。若し又克己の中から、強意を取り去つたならば何が残るか、やはり克己の意味すらも消失してしまふのである。

意志のない計畫は、たとへそれがどんなよい計畫であつても、結局は空想であり、夢である。實際ではない、事實ではない。大學に入學した夢、博士になつた夢、金儲けの夢、豊作の夢、位の高くなつた夢、人に賞められた夢、夢はいくらでも自由勝手に作りあげることが出来る。然し、夢はどこまでも夢であつて現實ではあり得ない。それゆゑに我々は、夢の千圓千石よりも、事實の百圓百石を尊ぶのである。空想の大臣博士よりも、事實の篤農家、老商を重んずる。夢や空想の大臣博士には如何なる薄志弱行者でもなれる。たゞ、現實の大臣や博士は、堅志硬行の人

でなければなることが出来ないものである。このゆゑに、夢想、空想に耽るものは、我等の友ではない。我が黨の士は、沈勇剛毅、堅忍不拔なる意志の人でなければならぬ。

四、意志の力

成業の根本は強意である。意志は扇子の要である。意志は機械の動力である。あらゆる必要の要素が、すべてこの意志に繋がつてゐるのである。

「千なりや蔓ひと筋の心より」

との俳句に於けるその一と筋が意志なのである。

「山下有流水、浪々無止時」

禪心若如是、見性豈其遲。」

と白隠禪師が申されてゐる。又、日蓮大師は、

「如何に身體健かなりとも、心甲斐なければ、一切の能無益なり」

と教へられた。流水の浪々として止まざるが如く、注意を見性に集中せしむるものは意志であ

る。一切の才能をして、益あらしむる心の甲斐とは意志のことである。意志は一切を統べる。一切は意志を俟つて、はじめてその効用を發揮するのである。

この意志の力が最も顯著にあらはるゝものは堅忍持久の場合である。人間大成の健鎗も、事業完成の秘訣も、一切はこの大河の如く、連峯の如く、洋々々々として絶えざる強意に存するのである。かの小野道風が、老年に至り、發奮して遂に日本第一の書家となつたのも、柳に飛びつく蛙の忍耐力に感動した爲めであつた。可愛い、坊ちゃん嬢ちゃんやんが歌つてゐる。

「枝垂柳に飛びつく蛙、飛んでは落ち、落ちては飛び、落ちては又飛ぶほどに、とうとう柳に飛びついた。」

「風吹く小枝に巢を張る小蜘蛛、張つては切れ、切れては張り、切れても切れても亦張る程にとうとう小枝に巢を張つた。」

と、さうだ、蛙や蜘蛛にさへも、斯の如き忍耐力がある。然るに萬物の靈長たる人間と生れて、三日坊主たり、兎の糞たり、禁酒もしてみた、煙草もやめてみた、朝起きもしてみた、日誌もつけてみた、百姓にもなつてみた、坊主にもなつてみた、色々やつても見、なつても見たが、結

局、今まで續いたものとは、汚名と後悔との外には何にもないと言ふが如きは、これ實に、蛙にも如かず、蜘蛛にも如かざる者ではないか。

誰れしも一度位はやつてみるものである。が、たゞやつて見た、して見たといふだけでは其人の眞の價値は定まらないのである。二度やり、三度やり、四度やり、五度やつて、千難を排し、萬障を蹴破つた人のみが、最後に勝利の月桂冠を得るのである。最初の突撃には、すべての者が勇者となり得る、しかし、強敵に立ち向つて、追ひ返され、追ひ返されても屈せず、岸に打ち寄する波の如く、百度、千度押し返して、遂に敵壘の頂上高く日章旗を翻へす者は少い。その者のみが眞の勇者である。

「始めあらざるなく、能く終ある者稀なり」
最後まで！ 最後の最後まで！ 最後の五分間を耐え忍んで、勝利を得た者が即ち眞の偉人である。

四、カーライルの苦心

英國第十九世紀の文豪に、カーライルといふ人がある。彼が有名なる佛蘭西革命史を著さんと
して、漸くその上巻だけの原稿を書き上ぐるや、之を友人のミルに示して、その意見を求めたの
であつた。然るにミルの家の女中は、誤つて之を反古と思ひ、何心なく火の中にくべてしまつた
のである。それを聞いたカーライルの失望落膽はどんなであつたらうか、彼は之が爲に、殆ん
ど失神せんばかりに驚き、且つ悲しんだに相違ない。若し之がカーライルその人でなくて、他の
人であつたならば、恐らくこの思はざる不幸の爲めに、當初の志は碎かれたであらうと思ふ。
然るに流石は彼であつた。その激甚なる失望の中から、徐ろに勇氣を恢復し、再び肝血を絞つて、
かの浩翰なる著述の草稿を作り直したのであつた。

凡そ文人の文を草するや、豆腐屋、菓子屋が、一定の型にはめて、豆腐又は菓子を作るが如き、
簡單にして容易なるものではないのである。或る時は沈思黙想して、一行の文をさへものする事
が出来ないことがあり、又或る時は、書きながら感激の心にひたつて、はふり落る涙を禁じ得ざ
るやうなこともある。

文は人なり

文は血なり
文は涙なり

眞に心血を絞らずしては、價値ある一行の文章も書けるものではないのである。我々は、天地
間に比類稀なるカーライルのこの詩史を編くことに、彼がこの不撓の勇氣、不拔の意志に對し
て、滿腔の敬意を拂はずにはゐられない。

我が國でも、本居宣長の古事記といひ、瀧澤馬琴の八犬傳といひ、徳川家康の天下取りといひ、
禪海和尚が、十有二年の辛苦に刻んだ青の洞門の開鑿といひ、大なる事業は、何れもみな拔群な
る強意の賜である。我々は、他の多くの物を失ふてもよい。たゞ一つ、この意志を失ふことは
出来ぬ。何物よりも大切な寶は、各人がその身の中に備へてゐる意志である。この意志を強め、
固めて、境遇も移す能はず、感情も動かす能はず、利益も、美貌も、誘惑も、恐怖も、一寸一分
これを左右することの出来ないやうな、磐石不動の大意志を作ることが、成功の唯一道であり、
修業の中心核である。

強大なる意志を養へ

強大なる意志を作れ。
我が一事貫行は、この強意を養ひ、強意を造る最善、最適、最簡の方法であり、且つ手段である。成功と幸福と修養と公益とを熱望する人は、何人も來つて、まづこの門を叩かねばならない。

第二章 偉大なる人間の力

一、斷行の意氣

人間の力は、非常に強大なものである。仕やうとさへ思へば、如何なることでも出来るのである。吾等は須らくこの自己の偉力に目ざめなければならぬ。何が出来ぬ、彼が出来ぬと、弱い人間が弱いことを云ふが、之等はすべて、自己の中に偉大な力のあることを知らぬ爲めに言ふのである。大抵のことは出来ないのではない、爲ぬのである。何事でも、斷じて行へばやり得るのである。酒が止まぬ、煙草が止まぬ、早起が出来ぬ、貯金が出来ぬ、主人の信用が得られぬ、學校

の卒業がむづかしい、日誌がつけられぬ、女狂ひが直らぬなど、言ふが、皆、自分勝手の逃げ口上に過ぎないのである。現に我々の周囲には、酒や煙草をやめた人が、今迄に、幾万人もあるではないか。その日の生活にも困るやうな、貧しい世帯から、大金を造り出した人も數知れずあるし、又何十年といふ永い間、引きつゝいて早起をしたり、日誌をつけ通して來た人も、幾百万人あるかも知れぬ。彼も人も、我も亦人も、彼の成し得た事が、なにゆゑに自分には出来ないのか。そこを考へてみる必要がある。天はそれほどまで不公平に人間を造りはしなかつた。出来ぬと言ふのはせぬのである。「能はざるに非ず、爲さざるなり」である。「舜何人ぞ、我何人ぞ」である。舜がした程の事は我にも出来なければならぬ。

「不能といふ字は愚人の辭書に在り」

とナポレオンが言つた。大決心で取り掛れば、何事でもやれるのである。斷じて行へば、鬼神も避けるのである。然るに何事をも、出来ん／＼で片付けてしまふのは、みな、弱虫の遁辭といふものである。向上の意氣なく、斷行の勇氣なく、自分で自分を見くびつて居る意氣地なしが、この世の中で一番下等な人間である。

二、無限の力

如何に人力が無限だからといつても、世には人力の到底如何とも成し能はざる部分も有る、之は分りきつたことである。凡そ人間が神様でない以上は、どの様なことでも自由自在に出来るとは言へぬのである。中には屁理窟を言ふ人があつて、「そんなに人間の力が大きいものならば、天に昇れるか地の底に行けるか。若もそれが出来ぬなら、人力が偉大だ、無限だ、とは言はれまい。」などいふ者があるかも知れないが、それは單なる屁理窟であつて、苟くも常識ある者ならば、左様な愚問を發する筈はない。如何に人間の力が偉大であると言つても、早魃が続いた時に、雨を降らす事も出来ず、或は又、降る必要が無い時に、雨や雪の降るのを止める譯にも行かぬ。子供の無い人が、是非とも我子を欲しいと思つても、生めぬ者は生めぬのである。之も努力が足りないのだと言つたところで、それは言ふ方が無理である。百までも二百までも生きてゐたいと願つてみても、それも畢竟叶はぬ願ひである。かくの如く、如何に努力してみても、人力の及ばぬ所はある。故に昔から、

「人事を盡して天命を待つ」

と言つてある。若しも人力でもつて、宇宙間のありとあらゆる物事が、すべて任意に左右し得らるゝならば、最早それは神様であつて、人間ではない。神様ならぬ我々には、勿論出来ない事も深山に在る。然しながら今さら人間を神様に比べてみて、出来ない事があれこれと在るからといつて、人間をつまらぬ者と見くびるなどは、鳥許の沙汰であらう。人間に獨立自尊が必要であるからと言つて、子供の時から絶対に親の世話になるなと教へる者は一人もない。人力が如何に絶大であるからといつて、何人も神様の上に出よと教へる者はない。こゝに私が、人間の偉大な力を讃へるのは、何も神業をなし得るといふのではない。人として、あらゆる困難辛苦と闘つて、あくまでも目的に向つて不斷に精進するに於ては、必ず偉大なる働きが達成せられるといふのである。私は、その貴い力を讃へるのである。

三、個性の別と力の活用

又人間は生れるからして、個性といふものがある。顔が違ふ、心が違ふ。時には他人の容似と

いふ様なものもあるが、それとても、顔なり、姿なり、心なりの一部が似てゐるのであつて、完全に相等しい二人の人間などのあるものではない。而して個性の相違は、やがて人に長短の在る所である。記憶力の旺盛な人もあれば、至つて物覚えの悪い人もある。算数の技に長けてゐる人もあれば、至つて之のまづい人もある。大學者でも字の下手な人がある。元帥大將でも、口にかけては落語家講談師には及ぶまい。無論下手な事でも、練習を積めば、或る程度までは成功せぬものでもない。しかしさうだからと言つて、私共がいかに練習をしてみても、大錦を打ち斃す程の大力士にはなれないし、又大錦が、如何に勉強をしたからと言つて、義大夫や浪花節では、呂昇や奈良丸には追つ付けまい。古語にも、

「藝は道によつて賢し」

とある通り、甲の長所は乙の短所、丙の短所は丁の長所といふ様なことがある。随つて人間の力が、如何に強大であるからと云つても、個性を無視し、天賦を蔑視して、盲目的に突進する事は宜しくない。さういふ事をして、右往し、左往し、迷ひに迷つて、遂に何等の成功もなし得ないといふ人が時々ある。之は活人剣を誤つて殺人剣にし、靈藥の分量をまちがへて、却つて毒

藥とした人々である。萬能者、多くは一藝なく、足の多い百足虫は随分と歩くことが遅い。だから人間の力が如何に大なるものであるとしても、無制限に放散してならぬ。盲目的に投資をしてはならぬ。之等も多少世路の辛酸を嘗めた人は、よく／＼承知してゐる事であるが、或は無鐵砲な企畫を立てる人がないとも限らぬから、一言の警戒を加へて置く必要があらう。

然し普通に、人々が、むづかしい、困難だ、出来ん、成らぬ、不可能だ、駄目だといふ中には、此人力の極限外、個性の制限外の事ではなくて、多くの場合、爲せば成さるゝ限度内の事を、出来ぬ、成らぬといふてゐるのである。酒や煙草がそれである。不平や腹立ちがそれである。朝起や節儉がそれである。孝行や親切がそれである。讀書や日誌がそれである。静坐や強健術がそれである。それ等は何れもなせば悉く出来る事である。然るにそれを出来ぬといふ。さうして之を辯解して、天だから、命だから、運だから仕方がないといふ。何といふ臆病者であらう。そして又何といふ横着者であらう。

辯解の勇者は、概して實行の弱者である。それゆゑに私共は一切の辯解を無意味とする。そして、たゞ一心に進むことに全力をこめたい。煙草を止めたからと云つて、病氣にもならず、酒を

やめたからといつて、死にもせぬ。氷山の十分の九は常に水中に在るといふが、人間の力も、その大部分が平生は匿れてゐる。非常な困難に出遭ふとか、大切な決心をしたとかいふと、匿れてゐたこの潜勢力が、勃然として顯れて来る。盲者を見よ、指先で字がよめるではないか、聾者を見よ、口の動き方で意味を解するではないか。相撲取を見よ、裸體でも風を引かぬではないか。輕業師を見よ、一本の竿の上でも踊るではないか。かゝる偉力が各々の人にある。たと平生は潜勢力として匿れてゐる。故に人は、我身にかゝる大力の在る事を知らずにゐる。が、一朝、切ばつまつた困苦に遭ふと、猛然としてこの大力は發現し我ながら鬼神の業かと思ふのである。然し鬼神でも何でもない。もともと各自の心身の中に隠れてゐた力が、たまたまその機會に、表面に現はれただけのことである。

四、力を發現する方法

然らばこの偉大にして靈妙なる吾人の潜勢力を、如何にして發現せしむべきかといふに、之が爲には、各々自分にとつて、最も苦しい仕事に突進するが一番に近道である。勞苦が自分を磨い

てくれ、辛苦が自分を鍛へて呉れるのである。而して其辛酸困苦の度が大なれば大なるだけ、琢磨の功、鍛錬の蹟も大である。五十の苦勞をした者には、十の苦勞は苦勞にならず、百の苦勞をした者には、五十の苦勞は平氣である。昔ならば大名の息子、現今ならば華族の若様と言ふ様な者には、弱味噲や低能兒に近い者が多い。富家の子弟にもこの種の者が少くない。一體之はどういふ譯かといふと、少しも苦勞といふもの知らぬからである。無限に強大なる人間の力、神に入るまでに進み得る我々の力は、困難にぶつかつて、初めて現れて来るのである。

古今東西の英雄豪傑は、大抵貧苦の膝で育て上げられた者であつた。獅子は子を生んで三日目には、之を谷底に落とすといふが、此谷底に突き落された獅子の兒が、幾多の辛苦艱難をつんで、もとの所へ上つて来る間に、將來百獸の王となる偉大なる力が磨き出されるのである。艱難辛苦を鬼や蛇のやうに恐がつて、あちら、こちらと逃げ廻つてゐる人間には、偉大な潜勢力が自覺されず、又發現する機會も與へられないのである。かくして出来上つた人物は、海月の出来損ひのやうな、骨のない、グニャ／＼の薄志弱行者である。我等はかゝる人物を憐む、我等は斯る人物を卑しむ、我等はかゝる人物を好まない。吾人はあくまでも堅心硬行の人でなければならぬ。吾

人は石心鐵腸の人でありたい。

「うきことの尙この上に積れかし、限りある身の力ためさん」

丁度この歌が示してゐるやうな、意氣ある人間でありたい。惡戰苦闘の幾歳を、滿身創痍に送つても、尙自若として、七轉八起の計畫に熱中する位の人物でありたい。前にのべたカーライルや禰海和尚のやうな、強き意志の人でありたい。而してかくなる爲には、どうしても、苦勞に向つて突進しなければならぬ。朝仕事はいや、夜學はいや、粗食はいや、薄着はいや、雇はれるのはいや、使はれるのはいや、禁煙はいや、禁酒はいや、暑い日はいや、寒い日はいやと言つたやうに、厭々づくめで暮してゐては、斷じて鐵腕鐵意は造れない。人間の裡に藏されてゐる偉大な力は現はれて來ない。随つて大人物にはなれず、小事業と雖も完成することは出來ない。境遇と地位とに應じ、自己の身邊を仔細に見廻して、こゝぞと思ふ困難に、奮起突撃しなければ、その人の一生は暗である。

第三章 現代文明と一事貫行

一、文化と生活

學者も凡人も、世の中が開けた／＼と口辯の様になつて、開けるといふのは、一體どの様な事を指して言ふのであらうか。開けたといふのは、千里一瞬の汽車が出來、四萬噸、五萬噸の大汽船が出來、議會が出來、富豪が出來、無線電話、自動車、飛行機、ラヂオ、テレビジョンなどが出來た事だけをいふのか、或は又、日本刀がサーベルになり、編笠が帽子になり、洋食屋やカフェーやバーが殖えたことをいふのであるか。けれども私はこゝで考へてみなければならぬ。汽車や汽船で四通八達の便利だけはあるが、さてその汽車や汽船に乗る人間の様子はどうかであるかといふに、その一等二等は、下品な成金輩や、藝者とも淫賣とも判斷のつかぬやうな、穢らはしい連中で賑つてゐるし、三等は又三等で、生活に疲れたる人々を滿載し、お互に座席を争つて、老人子供を突き飛ばしてゐる。それでも矢張り汽車や汽船さへあれば、世の中は開けたと言へるのであらうか。或は又、帝國議會なるものはあるけれ共、之とても一名動物園てふ渾名さへある位で、代議士は大偽士、衆議院は醜議院と見做して居る者も少くはなく、畏れ多くも宮城及び御所

の所在地であるところの、東京市及び京都市を始めとして、其他多くの都會では、市會議員の收賄行為が暴露して、市會議員ではなくて私懷議員だらうなど、言はれてもゐるが、それでも矢張り國會議事堂や市會議事堂さへ嚴然と建つて居れば、文明開化と稱しても差支へはないのであらうか。或は又、國富が増したの、富豪が増えたのといふ事は聞くけれども、さりとして貧民や窮民の數が、それに比例して減つたとも思はれぬ。働くにも職業がなく職業があつても食へぬといふ人間が社會に充満した。それでも果して文化は駸々として進んだと言へるのであらうか。

他人はいざ知らず、かやうな世相を見て、私等は「否」と答へざるを得ぬ。皮相の文明はあつても、内實の文明はない。虚偽の文化、不完全の文化はあつても、眞實に人をうるはず完全な文化があるとは斷じて言へないと思ふのである。

二、文明の弊害

現代の經濟學は價格經濟學であつて、厚生經濟ではなく、教育は主知教育であつて、人間教育ではなく、文明は多忙と繁雜と喧囂とに充ちて、眞に各人の健全にして幸福なる生活を進めやう

とはせぬのである。之が現代である。之が現代の文明である。汽車や電車の出來たお蔭でなるほど便利になつたには相違ないが、之が爲に人間の脚力及び一般體力は著しく弱くなり神經衰弱や、氣狂が大いに殖えて來た。自分がかつて汽車の中で、飛驒の國高山在のお婆さんと話をしたことがあるが、六十ばかりのお婆さんが三人で、自分の家から岐阜に出るまでの三十里を、一日十里づゝ三日間歩き續けて、元氣は平生と少しも異なるところなく、之から京都の本願寺へお参りをするのだと言つて、喜び勇んでゐるのに會つた。然るにこの日、自分は京都の或る家へ立寄ると、丁度今日はこちらにも二三人つれ立つて、高雄へ紅葉を見に行つて來たといふところであつたが、何れも三十前後の元氣盛りの人々であるに拘らず、往復數里の觀楓に疲れきつて、まるで病人同様の重態であつた。親しい人が、わざ／＼立ち寄つて下さつても、慾も得も禮儀もない、今夜ばかりは起きられぬと云ふ有様。之を見て、私は晝間會つた老人達の元氣矍鑠たりしを思ひ合せ、つく／＼と文明が人を弱くする事の甚だしきを痛感せずには居られなかつた。醫術が進歩して病人が多くなり、國富が増加して貧民が殖え、夏は避暑冬は避寒、それ厚いシャツだ、それ煽風機だと、人間の抵抗力は眼に見えて減つて來る。タカジアスターゼを飲むが故に胃が弱り、

柔かい物ばかり食ふが爲めに、齒が弱り、讀書するから近眼になり、心配するから神經衰弱になり、かくて弱い人間は更に弱い子を生み、その弱く生れた子供を社會が更に弱くする。この調子で行くならば、人類は滅亡する外に其の行き道がないのではなからうか。

三、現代の文化

又現代は金と智慧との世の中である。更言すれば、物質と智力との世の中であつて、知識が重んぜらるゝ文明である。知識は外界の自然を征服して、之を吾人の日常生活にまで提供した。汽車といひ汽船といひ、自動車といひ飛行機といひ、電信といひ電燈といひ、宏壯なる邸宅といひ美麗の服装といひ、孰れも皆、人間智力の發達が齎した科學的文明の賜物に非ざるはない。今より約四百二十年の昔、西洋では東ローマ帝國の滅亡後、ほとんど百年に亘つて、伊太利を中心として、人間の一大自覺運動が興つた。史家は之を「文藝復興」といつてゐる。この文藝復興以來、人智は急速に進歩して、科學の發達は驚くべき便利と奢侈とを人間に與へたのである。行く世界は廣まり、見る世界は高まり、都會は不夜城となり、山間は避暑地となり、着る物は軽くして美

しく、食ふものは柔かくて甘い、それは實に、極樂とも天國とも、譬へ様のない開けた世界がこの地球の上に造り出されたのである。

然しながら、之は畢竟智力の文明である。物質の文明である。それゆゑに、肉の満足は得られず、靈の満足は得られない。繁華は人間を横着にし、便利は人間を弱くし、享樂は人心を悲しくし、奢侈は人性を軟化した。かくて一度暗黒なる宗教の束縛をはなれて、知識の自由を得た人間は、やがて又知識の爲に囚となり、科學のお蔭で進歩した社會が、今は又科學の爲に滅亡の淵に押し流されんとしてゐるのである。今日の文化は、聰明の文化ではない。然し、身體を強くし、感情を美しくし、意志を鐵石の如く鍛へる所の文化ではない。言ひかへれば、人間を賢くする文化ではあるが、同時に人間を不幸に落す文化である。

四、意志鍛練の必要

現代のこの文明、この風潮に迎合するものが、即ち今の主知主義の教育である。教へる主義、知らせる主義、機械的詰込主義の教育である。普通に教育は進歩したと人は言ふが、それは單に

量の進歩であつて、質の進歩ではない。多くの人に教育の行き渡ることは行き渡つたが、その内容は、ヘルバルト（十九世紀の有名なる獨逸の教育學者）式の苦心させずに面白がらせて、知識ばかりを教へ込む主義の教育である。故に今日の人間は、知ることにかけては進んだもので、百科全書に匹敵する程に多量な知識が頭の中にギツ、シリとつめこまれてゐやう。さりながら、身體の強健は、知識の多きに伴はず、情意の陶冶に至つては、知識の多いさと全然反比例に進むらしき傾向さへもある。故に見てごらんさい、山奥の人は親切で正直で、身體も亦強健であるが、都會地の人間、教育ある人間は、不親切で不正直で、そして身體の弱い者が多いではないか。

今日、最も必要な教育は、主知主義の教育ではなくて主意主義の教育でなければならぬ。教へる主義、知らせる主義の教育ではなくて、やらせる主義の教育である。孝行でも敬神でも博愛でも體育でも、單にその必要を知つてゐるといふだけでは、何の價値もないのであつて、眞の價値は知つてゐることを行つてゐるか、はた行つて居らぬかによつて分れるのである。昔支那の王陽明先生は、

「知つて行はざるは是れ未だ知らざる也」

と喝破し、「行ふて初めて知る」と教へて、實地の經驗、事實上の練習を強く唱道せられたのであつた。やる主義に限る、やる主義に限る、書物をつつの本箱から他の本箱に入れかへる様な、詰めかへ主義の今の教育は、何の役にも立たぬ。偉人日蓮は、

「身を以て經を讀む」

と申されたが、身を以て經を讀み、身を以て書物の内容を味ふのでなければ、眞に知つたとは言へぬのである。現代文明の弊害を救ふものは、實に主意主義の教育である。小學校の生徒にも少く教へ多くやらせる。中學校、高等女學校の生徒も同様、青年團、處女會等の修養も亦同じである。何よりも彼よりも、先づ以て其意志を鍛鍊し、更に其の鍛鍊された意志を通じて體を鍊り、情を養ひ、知を磨かなければならぬ。

強き意志！
強き意志！

それが現代の誤れる文明を立て直す根本の力である。
強き意志！

強き意志！
その強き意志を養ふ所の、わが一事貫行主義こそは、現代文明の癩癩を治療する六〇六號の注射液ではあるまいか。

第四章 日本國民性と一事貫行

一、日本人の長所短所

前章に於ては、東洋西洋を通じての、現代文明の特徴及び傾向よりして、意志鍛錬の必要を力説したのであつた。本章に於ては更に活眼を轉じて、同じ觀點に立ちながら、我等日本國民自身の特性に就いて、その長短を反省してみたいと思ふ。吾人日本國民は、その各個人に就いて見れば、相同じからざるそれぞれの性質があるけれども、之を打つて一丸とし、國民全體として見た時に、果して吾等は如何なる長所を持ち、又如何なる短所を備へてゐるであらうか。之が本章に

於て、諸君と共に研究せんとする主題である。

日本人は武勇に富む。日本人は戦争に強い。日本人は祖先を大切にし、又禮儀を重んずる。日本人は、機敏で、潔白で、優美で、織巧である。神社に表れ、櫻に現れ、古事記に現れ、萬葉集に現れ、或は日本武尊、菅原道真、織田信長、乃木大将等に體現されてゐる長所は、すべて我國民性の長所である。斯の如き長所に於ては、何處の國民に於て負けるものではない。

實際日本國民は、長所の多い國民である。よく理解し、よく感激し、よく模倣し、よく實行する國民である。然し又、かゝる美點、かゝる長所の反面には、尠からざる缺點もないではない。狂熱的、排外的で、自尊心が強く、負けず嫌ひで、小規模で、輕卒で、飽き性で、氣短で、上ずべりで、近眼で、親の脛を噛むことを恥とせず、早くより樂隠居することを手柄と考へ、親族の保護、官權の庇護によく依頼し、功名心の強い割合に獨立心が弱い。かくの如き缺點を有する者が、吾人の國人である。數へて見ると、長所も多い代りに短所も多い。而してそれら多くの短所の中でも、特に顯著なものとして吾人の猛省を要するものがある。それは何かと言ふと持續力の缺乏、粘着力の不足、何をしても花火的一時的で、牛の涎の様に、長く續かぬといふ事であ

る。日本人は此點に於て、酒に類して餅に類せず、馬に似て牛に似ず、折れ易き木と同じで、かの粘り強き竹の性質を持ち合せてゐない。こゝに日本國民性の一大缺陷が潜んでゐる。

二、日本人の使命

鄧く理想が日本に在る、正義を四海に宣布するといふ大理想がある。この大理想を完成するのが、我等日本國民の使命である。横井小楠先生が謳つてゐる。

「何ぞ吾に國を富まさんや、何ぞ吾に兵を強くせんや、正義を四海に布かんのみ」

之が我が國民の顯揚すべき理想であり、又日本國民が、永久に存続發展すべき所以の理想である。

日本は亡びざる國である。前者は開國の當初、皇祖の神勅によつて堂々と宣言せられ、後者は國民の信念として、九千万人の體の中を、脈々として巡つてゐる。

豊葦原ノ瑞穂ノ國へ、是レ我カ子孫王タルヘキノ地ナリ。汝皇孫行イテ治メヨ。實祚ノ隆マサンコト、天壤ト與ニ窮リ無カルヘシ。

遠大の理想は、吾が國土に植え付けられてゐる。久遠の使命は我等の双肩に懸つてゐる。世界には、國も多く人も多い、しかし理想の無い國、使命のない國民は、何れも皆一時の役目を演じて亡びてしまつた。立てよ國民、勵めよ同胞、お互にこの大理想を守り、この大使命を果すが爲に、奮進猛進しようではないか。

だが、翻へつて思ふと、國家興亡の跡は、内部に於ける國民性盛衰の表現である。その起るも國民性の致す所である。國民性の長所が、その短所を蔽ふ時はこれ即ち國運昇天の時である。國民性の長所に包まれたる短所が、漸くその猿尾を表はし來る時は、これ即ち衰亡の兆ある時である。短所益々昂じて長所を蔽ふに至つては、國家は滅亡の外に道なきの時である。實に我等が有する國民性を訓練することは、國運發展、理想顯現の爲の第一の要素である。

氣短で飽き性は、日本人の缺點である。耐久力、持続力の乏しきは、國民の短所である。この短さを補ひ、足らざるを足して、火も焼くべからず、水も浸すべからざる、金鐵の大意志を造ることは、正に國民教育上、國民修養上の要務である。大理想を遂げんが爲にはそれに相應する大意志を必要とする。意志が大事、意志が大事、意志強きものは大智に優り、意志弱き者は低能に

も劣る。意志だ、意志だ。之が日本國民の、正に全力を集中すべき所である。

三、一事貫行の力

然らば、良き意志とは如何なる意志であるか。曰く「集中適確にして、持続力の強大なるもの、而も其集中し持続する所の目的物が、常に善きもの、價値あるもの、有益なるもの」を指して言ふのである。集注力と持続力とは、意志の分量である。善きもの、價値あるものに向ふは、意志の性質である。この性質と分量とが兼ね備はつて、

- (1) 良き事柄に、
- (2) 一心不乱になり、
- (3) 而も決して中途に斃れないもの、

この要件を具備するところに良き意志なるものが出来るのである。

世の中には、注意力の纏まらぬ人、或は何事にも、一生懸命になり、三昧に入る事の出来ぬ人がある。之は意志の集注力が弱いのである。又世には、何事にも飽きつほくて、少しも永續のせ

ぬ人がある。之は意志の持続力が足りないのである。石の上にも三年、壁に向つても九年の辛抱をするのでなければ、大事を成し遂げることは出来ないのである。更に又、世の中には、兎角他人の邪魔になり、社會の害毒になるやうなことを、恥ぢず恐れずに、熱心にやる人もある。之は意志の性質が悪いのである。

集注力が弱くてもいけない、持続力が足りなくてもいけない。性質がわるくてもいけない。三者揃つて、始めて好き意志となるのである。が此中でも、特に日本人に缺けてゐるものは第二の持続力であらう。意志たるの本領を示すべき中心的部分が缺けてゐる。集注力はかなりある。性質又必ずしも悪くはない。たゞ持続力の一點に至つては、極端に弱い。之では國運の徹底的發展を期し、理想の萬全的完成を見ることは、とても不可能なことである。

是れ私が、本書に於て、特に國民性の訓練を高潮する所以であると同時に、全國民に向つて、その強き意志や、確き意志を造る最良の方法として、わが一事貫行への入門を勸奨する理由でもある。

第五章 強意を造る最良法

一、求むるもの

強い意志が、それ程までに大切なものであるならば、その強い意志を得るには、どうしたならばよいのか、其方法を示してもらひたいと要求する人が多からうと思ふ。峨々たる巖石をも打ち通す不敵の溪流の如き強豪、斃されても倒されても、起き上り起き上る不倒翁の如き強意、彼の禪海和尚の如き、若しくは將軍家康の如き強靱なる意志は、如何にして造り得らるゝのか、是非教へて貰ひたいと言ふ人が多からうと思ふ。

私は其人たちに教へたい。玉を得んとする者は、まづ深山に入らなければならぬ。虎兒を獲んとする者は、まづ虎穴に入らなければならぬ。而して強い意志を造らんと欲する者は、まづ一事貫行の門に入る事を必要とする。我が一事貫行は、人生の鐵則教である。無例外宗である。一度

斷乎たる決心をして、自己改造の一事業にとり掛れば、貫行して以て慣行となるまで、決して中止したり挫折したりすることを許さぬのである。敢て私は斷言する。欲するもの、之を君に與ふ、ゆゑに其代償を拂ひ給へと、強意は無報償では得られない。之に相當する代償を拂ふことが必要である。而して一事貫行の苦勞こそは、正にこの強意——あらゆるものにも優る寶——を求むる爲の貴き代償である。私共が、一事貫行に熱中するその熱度の大き深さに比例して、我々は、いな神は——如何なる強意をも欲するがまゝに與へ給ふであらう。

二、使へば太る

手を使へば手が太くなる。足を使へば足が太くなる。體を使へば體が強くなり、意志を使へば意志が強くなる。之は自然の法則である。使はず、用ひず、働かずしては、何物をも強くし太くすることは出来ないのである。農夫の腕を見よ、車夫の脚を見よ、拳闘家を見よ、柔道家を見よ、力士を見よ、使はずして、この腕、この脚はあり得ない。動かさずしてこの脊、この腹はあり得ない。犬は脚が強いから走るのではない。走つたからこそ脚が強くなつたのである。獅子は齒が丈

夫であるから、骨を食ふのではない。骨ぐるみ食つたが故に、齒が次第に強くなつたのである。使へば進歩し、使はねば退歩する。之は精神でも身體でも同じことである。尤も之を使ふにも程度があつて、使ひ過ぎれば又害がある。

「過ぎたるは尙及ばざるが如し」

といふ格言もあるから、適度を知り、程度を守ることが肝要であるが、或る程度までは、どうしても使はねば發達せず、用ひなければ進歩せぬ。總ての事がこの通りである。随つて我等の意志も、この原則に外れる事はない。使ふべし、用ふべし。意志を強くせんと欲する者は、須らくその意志を使用しなければならぬ。

三、意志鍛練の道場

青年期は修養の時代である。この大切なる時代に於て、若しも修養を怠る人があるならば之れ即ち、終生不幸の種子を播くものである。それゆゑに青年は、何人と雖も、まづ修養に精進しなければならぬ。而してその志すべき方向は、素より多岐多端であらうけれども、その數多い修

養道の中に於て、あらゆるものゝ土臺となり、基礎となるものは何であるか、それは實に「意志」そのものである。この土臺が確かり築かれてゐないならば、いかに善美なる計畫も、いかに宏壯なる建築も、一朝にして崩壊する。だから意志を鍛練するところの、精力集中、堅忍徹底、奮闘努力する習慣を養ふにも増して大事な修養はないのである。

軟弱なる性質は、時に優美である。愛嬌に富むこともないではない。しかしながら、かくの如き性情は、到底方針を力守し、主義を維持するに適せず、困難と見れば忽ち逡巡し、一度躓けば再び起つ勇氣更になく、恰も舵なき舟が漂々として、風のまに／＼何處ともなく吹きつけられるやうなものである。この種の人も、快調順風に帆を上げてゐる間は、あまり堅志硬行の人と變りなからうが、一度疾風怒雨の猛烈として來るに遭へば、忽ち舵を失ひ舟を覆へして海底の藻屑となり果てしまふのである。

社會は一大學校である。人生の周囲は、何人もその意力を養成し、鍛練する事柄でみちみちてゐるのである。世路の難關、人生の競争、孰れか人をして強固の意志を造らしむるの因たらざるものありや、然るに不幸にして、この活社會に觸れず、この世間と遠ざかつて、溺愛の教育を受

け、常に防波堤の内にて於てのみ舟を操り、室咲きの花、手の中の玉の如くに珍重されて得たるものがある。彼等こそは、大切な修養時期を「幸福の檻」の中に過して、他日の後悔をこの間に播種するものである。

「一人の息子と寒菊は、かはいがられて孤かぶる」

といふ歌は、この道理を語るものでなくて何であらう。外物の刺戟、世上の風波、これ皆必要なる吾人が意志鍛錬の道具である。探つて以て、大に之を利用し、活用しなければならぬのである。

「世路風霜、是吾人鍊心之境。世情冷淡、是吾人忍性之地。世事顛倒、是吾人修行之資」

「才能は幽寂の境に於て修め得べきも、品性は世界の大潮流に於てこれを録らざるべからず」
古人のこの教へは、まことに名言と云はなければならぬ。

四、失敗即ち成功

失敗は即ち成功である。失敗を以て單なる失敗となす人には、將來成功の望みはない。然し其

失敗の碎屑の中から、砂に交る砂金の如き成功の要素を認めて、之を捕へ来る者は、遂に失敗を轉じて成功とし、枯野を變じて花の野となす者である。海道一の弓取と云はれた家康も、始めから勝つてばかりゐたのではなかつた。漢の高祖は、百戦百敗の將と誹られたが、そのお蔭で城下の戦で最後の勝利を得たではなかつたか。その他クロムウェルでも、チスレリーでも、議會の初舞臺に立つた時は、何れも田舎者として笑はれたものである。古今多くの大文學者も、最初の處女作では多くはその名が立たず、或は酷評さへも加へられてゐる。落馬も乗馬の上達に必要であり、落選も當選の秘訣をつかむ要素である。古代人が夢想した錬金術といふものは完全に失敗であつた。然し今日の赫々たる科學の成功は、この失敗した錬金術より生れたのである。

失敗の経験なくして、大成功をなしたる人は殆んどないのである。よし又假りに有りとするもの人の成功は、屢々失敗の経験を嘗めたる人の成功に比すれば、價值甚だ小なるものである。何となれば、たとへその外面の大きさは同一にしても、甲の内面は擴充せず、乙の内容は充實してゐるが爲である。甲には今後、しらすく、失敗の淵に近づく危険性があるけれども、乙には全然その心配がないのである。

失敗は神の遣はせる最良の教育者である。この教育者に導かれて成長したる者は、その経験が深刻であるだけに、その意思が強い。加之、幾多の失敗を経たる後の成功の愉快は、未だ嘗て失敗したることなき成功者の、夢想だもする能はざるものである。「時」を隔て、眺むれば、一切のもの皆美しいとは云ひながら、成功の峰に登つて、苦勞の谷、失敗の坂を見返すばかり美しいものはないのである。旅行に於ても、苦勞失敗の多かつた旅行ほど、思ひ返して樂みの深いものであるが、人間の一生も、長い旅行であるからして、矢張り苦勞失敗の多ければ多いほど、後に至つて成功の快樂が大である。實に失敗は神の恩恵である。多くの植物が、暗い夜間に成長する如く、人間の意志が、暗澹たる失敗中に驚くべき成長を遂げるのである。失敗は恐るべきものでもなく、悲しむべきものでもない。成功の大河は、その水源を、暗澹陰鬱なる失敗の谷間に發することを知らば、吾人は寧ろ感謝してこの失敗を迎ふべきである。敗れて立ち、敗れて立ち、轉んで起き、倒れて起きて、こゝに絶大の意力が涵養せらるゝのである。意志の強き人はよく意志を使ふといふ事は眞實である。然し、よく之を使ふが故に其の意志が強くなるといふ事はより以上の眞理である。使ふべし、使ふべし。機械は使ふことによつて滅じ、人力は使ふことによつて増

すのである。使ふが故に滅るものと思ふのは、人間を以て機械と誤認するものである。

五、強意鍛練の苦行

各人すべて、自分にとつて苦しい仕事があるであらう。其苦しい仕事を敢て自ら進んでなせ。強意を練るの第一は、苦しい仕事にぶつ突かる事である。厭を厭とせず、嫌ひを嫌ひとせず、強ひて、(人に強ひられるのではなく)無理に、(他人より無理往生に押し付けられるのではなく)その不愉快な事、その苦しい事を敢行するのである。貫行の第一歩は、敢行であり、その終局は又慣行である。

冷水浴は寒い。然し寒いと言つて床の中にねてゐては、欲する強意は作れない。グズグズ言はずに跳ね起きて、眞つ裸になり、井戸側へ行つて、冷水を肩先から、ザブリとかぶるのである。今日かくの如く、明日亦斯の如し。意志は此間に練られるのである。酒をやめるのは苦しい。苦しいと言つて止めなかつたならば、いつ迄経つても飲んだくれであり、いつになつても貧乏人である。然るにその苦しいのをジツと耐へて、人が飲んでも自分は飲まぬ。人が勧めても立てた

志は動かさぬ。一日たち、二日たち、三日たち、一週間になり三週間になつて、だん／＼と其苦しさが消滅する。此間に強意が養はれてゐるのである。日誌を毎晩記すにも五月蠅と思ふ日もあらう。朝早く起きるにしても眠い日がある。腹の立つ日がある、書物の讀みたくない日がある。それでも一度日誌を記すと定め、朝早く起きると定め、腹は立てぬ、毎日讀書をすると決定した以上は、親や自分の大病といふが如き大事件に非ざる限り、苦しいとか厭だとかいふ理由によつては、斷じて止めぬのである。

そこに意志の鍛錬があるのである。勇ましく誘惑の魔と戦ひ、敢て習慣の惰性と對抗してこれに打ち克ち、之を征服する處に、強い意志、即ち石心鐵腸が練られるのである。子供ならばいざ知らずであるが、既に青年にもなつた者は、他人の強制束縛で、餘儀なく之に従つてゐると言ふ様ではならぬ、悪習打破の戦争は、宜しく自發的たるべし。意志鍛錬の苦行は、宜しく能動的たるべし。自ら選り、自ら定め、自ら進んで貫行しなければならぬ。意志を練るは意志を使ふと同じである。而して意志を使ふとは、苦しい仕事を敢て行ふと同義である。敢て行ふ也。敢て行ふ也。敢て困苦に突貫する所に、金情鐵意が造られるのである。

第六章 徹底の境地と一事貫行

一、徹底とは何か

修養は徹底を期する。研究も亦徹底を要する。而して我が一事貫行は、即ちこの徹底の指導者である。

徹底とは底までとゞく事である。根本まで溯ることである。源泉まで突込むことである。やり遂げることである。中途半端でなく、宜い加減でなく、人前でなく、中ぶらりんでなく、事物の根本、根元、根底に、深く／＼喰ひ入り、突き入り、透入 (Penetration) することである。即ち理智の上からは、根本的研究にまで進入し、感情の上からは、自己衷心の満足を標準として、笑はれても、嘲られても、恐れず怯まず勇進し、實行の上からは全人格的努力、即ち命がけで以て働くのである。而して之を成さしむるものは何かと言へば、強意である。徹底の第一要素は

強い意志である。人の機根に練達の迅速はあつても、強意でもって集中し持続し、命がけの工夫を凝らして取り懸れば、徹底せぬことはないのである。
上じりでは何時になつても徹底はせぬ。他人の命令や責罰を恐れて、厭々ながら仕事をし、或は又、他人の賞讃や喝采を自當として、人前を飾りつゝ、見せびらかしの仕事ばかりをしてゐては、徹底はせぬ。慰み半分や上つ調子で、やつて見たりやらないでみたり、兎糞馬糞の切れぐに仕事をしてゐては、断じて徹底はせぬ。徹底は命がけの繼續、一心不乱の持續にある。科學上の眞、道徳上の善、藝術上の美、肉體上の健、何れも皆一生懸命の持續によつて、その奥底に達し得るのである。その堂奥に上り得るのである。

二、徹底の境地

徹底の要件は一事にある。全精力を集中せざれば徹底せず、而して全精力を集中するには一事に限る。一つでよい。一つで十分だ。否一つに限る。たゞの一つに限る。其一つに全力をこめ、全心を打ち込むのである。ピツタリと其仕事と一つになりきつてしまふのである。仕事が我が、

我が仕事か、水が波か、波が水か、分たんと欲するも分つ能はざる境涯に没入しなければならぬ。名人と言はれた或る俳優は次のやうに言つた。

「見物が少いからと云つて、藝を疎末にするやうな者は、到底上手にはなれませぬ。眞に名人となる者は、見物の多い少いに拘らず、見上手の有る無しを思はず、たゞ一心不乱に自分の心に満足の得られるまで、熱心にやり通す人である」

これ眞に味ふべき言葉ではなからうか。まことの教育者は、教育教授と一つになる。まことの藝術家は、繪畫なり音楽なりと一つになる。まことの道徳家は、善行そのものと一つになる。此の人たちにとつては、教育なり、藝術なり、道徳なりが、自分の親であり、子であり、妻である。こゝに於てか眞に教育の爲の教育、藝術の爲めの藝術、道徳の爲めの道徳といふものが生れてくる。こゝに眞理の發見があり、こゝに神秘の示現がある。

「鐘が鳴るかや撞木が鳴るか、鐘と撞木のあひが鳴る」
鐘が鳴るのではない、撞木が鳴るでもない、鐘と撞木のあひが鳴るのである。こゝに徹底境がある。徹底は、茲に到つてはじめて存するのである。事業その物と一つになり得ず、仕事その

事になり切らずしては、徹底はあり得ない。従つてまた眞の成功はあり得ないのである。一事に集中せよ。一事に執着せよ。眞の一事は即ち眞の徹底である。而して徹底とは即ち眞理の根をとり、全生命の綱を握ることであるからして、一事はやがて萬事である。故に眞に一事を得る者は萬事を得、眞に一事を得ざる者は、何物をも得ることが出来ない。

三、一事に徹底

文明は徹底的解決の集積である。中途半端や、生嚼りの研究實行が、どれ程にあらうとも眞の文明はないのである。一反の田を一面に浅く掘つてみた所で、滾々として清水の噴湧する事はない。僅か一坪の土地でもよいから、深く／＼掘るならば、そこに清水が噴出するであらう。百の林檎の落ちるのを見ても、それで地球の引力が発見せられるものではない。僅か一個の林檎でよい。たゞ其一個を観察して、此物の落ちる所以に徹底すれば、あらゆる物體の落ちる理由が分るのである。醫術の進歩も、化學力學の進歩も、農耕の進歩も、文學の進歩も、進歩といふ進歩は、すべて徹底的の解決を俟たなければ成就する者ではない。一方面でよい、一現象でよい。野菜の

研究でもよい。果樹の栽培でもよい。肥料の配合でもよい。家畜の飼養でもよい。飯の炊き方でもよい。洗濯の仕方でもよい。育児でもよい。家計でもよい。早起でもよい。規律でもよい。禁煙でもよい。禁酒でもよい。その方面、その範圍はどの位狭くてもよいから、兎に角一事をやり遂げなくてはならぬ。兎に角一事に徹底しなければならぬ。万金丹や仁丹では何にもならぬ。すべての病氣にきく薬は、言ひかへればどの病にもきかぬ薬である。そんな薬がたとへ山程にあつても、人間の病氣は直らず、人類の健康は増進しない。それと同様に、仁丹式、万金丹式の知識や經驗がどれ程にあつても、そんなもので社會の開化は出来ぬのである。文明の進歩は左様なものでは遂げ得ないのである。

四、一事は萬事

小積んで大となる。水の滴も海となり、塵もつもつて山となる。小事を侮らず、些事を忽にせず、一つ解決し、二つ解決し、三つ解決して、一步又一步、一日又一日、究明まで、完成まで、習慣まで、慣行まで、やつて／＼やり通す者は徹底する。この人が眞の行者であり、この人が即

ち強意の人である。一事一物、専心努力、易より難に、簡より繁に、外より内に、口より奥に、順序を追ひ秩序を保つて、中止せず廢止せずに進むのである。一時に二兎を追ふこと勿れ。兩手に花を夢想すること勿れ。一つを守るべし、一つを主とすべし。一は始めにして同時にすべてである。一切といひ、一生といひ、一天といひ、一統といひ、一般といひ、一命といふ時、一は總て全體を意味してゐる。一書を讀破するは万卷の書を粗讀するに勝る。一人の親友を得るは万人の朋輩を得るに勝る。一書の眞理は万卷の眞理と差異なく、一人の親友を得る道は、やがて万人の味方を造るの道である。一字を巧に書く事の出来る人は、万字を巧に書く事が出来る様になる。一つの音楽に熟達するは、よろづの音楽に上達するの本である。一事は即ち万事、一徳は即ち万徳。一を得よ。一を得よ。一事を得れば即ち万事を得る事が出来る。ゆゑに萬能を追ふ者は一能を得ず、一能を守る者、よく萬能を得るのである。

五、万事を貫く意志

一事を貫く意志の力は、万事を貫く意志の力である。我をして早起を貫行させる意志は、我をし

て禁酒を貫行させる意志である。我をして早起、禁酒を貫行させる意志は、我をして親孝行、貯金、讀書、體育等、あらゆる善事を貫行させる意志である。一個の蒸氣力電氣力は、汽車をも電車をも、汽船をも米搗機をも、動かすことが出来る。それと同様で、一個の強意は、以てあらゆる善事を完成することが出来るのである。

人には二個の創造者が在る。神と彼自身とが之である。神は原料と法則とを授け給ひ、人は自ら意志を働かして事物を造り出すのである。いかに原料はあり、法則は分つてゐても、意志の無い所には何等の發展も不可能である。歩く足は有つても、歩く氣のない人間は仕方がない。神秘を開く智慧はあつても、開く氣のないものに開けて來るためしはない。ゆゑに人にとつては、意志は一切であり萬事である。一個の意志は人事の總てを支配する。一事に打ち勝つ意志の力が、やがて萬事に打ち勝つ意志の力である。

一事に向へ、一事と戦へ。たゞの一事を貫け、たゞの一事を打ち従へよ。やればどうせ困難ではあるが、困難を恐れてゐては仕方がない。戦陣の苦勞なくして勝利はない。奮闘の辛苦なくして成功はない。その辛苦、その困難こそ、神の恩恵であり、御佛の慈悲である。歴史上に見ても、

偉い人は皆苦勞をしてゐる。

「天之將に大任を此人に降さんとするや、先づその心志を苦しめ、その筋骨を勞せしむ。」と孟子は云つた。困難辛苦ほど人を眞面目にして呉れるものはない。生れて一度も大なる困苦に出遇つたことのない人には、眞面目とは如何なるものか、その味はひが分らぬ。困苦と眞面目と成功とは、結局一つの道筋である。困苦は厭ふべきものではない。喜んで迎へるべきものである。困苦が汝の意志を強くし、汝の精神を眞面目にし、依つて以て人格の修養と事業の完成とを得せしむるのである。

困難大明神！ 困難大明神！

辛苦八幡宮！ 辛苦八幡宮！

この大明神、この八幡宮を朝夕に念じて、當面の一事一事に全力を集中し、以て所期の目的に勇往邁進しなければならぬ。

六、町村改善の方法

個人の修養も一事貫行でやるべし。家庭の改善も一事貫行でやるべし。町村の改良も一事貫行でやるべし。國運の進展も一事貫行で行ふべし。一事貫行は何處へ向けても使ふことが出来る。一事貫行の應用適用は、種類も範圍も無限に廣い。毎日、日誌、家計簿を記すとか、親孝行をするとか、人の惡と己の善とを言はぬとか、自適強健法を行ふとか、書物を讀むとか、間食を慎むとかいふが如きことは、個人的に行ふ方が便利であらう。早起、貯金、禁酒、禁煙等の如きは、個人的にも、家族的にも、部落的、町村的にも行ふ事が出来る。近ごろは自力更生とか、民力涵養とか言ふ事が盛に唱へられて、舊來の惡習を打破せしめやう、新しき理想の文化的生活に進ましめようとする努力が、各地到る處で熱心に試みられてゐる。私も、常にこの種の團體から招待されて講演に出る。然し、此間に於ける私等の經驗を率直に申せば、多くの地方では、この種の獎勵宣傳が尙十分の効果を奏しては居らず、何れかと言へば、失敗に近いと申すべき所が少くない。而してその不成功、失敗の原因たるや、も

とより一にして足らないであらうが、若し吾人の推察する所にして誤りなくば、その主因は、一時に多くを望むといふ事にあるであらう。

敬神尊祖もやらせなくてはならぬ。祭日には國旗を出させなくてはならぬ。軍人退營の土産物は廢止、嫁入の際に於ける嫁資には制限をつける。貯金の奨励、時間勵行も奨励、公設市場だ、産業組合だ、衛生だ、廢物利用だ、何だ彼だと、少い所で十數ヶ條、多い所は數十乃至數百にさへ及んでゐる。素より此中の、どの一つも無用のものとして無からうが、千手觀音様でもない我々人間に、そのやうにア、イ、コ、イと言つた日には、目のまふ外に効果はない。諺にも、二兎を追ふもの一兎を得ずと諷めてゐるが、六十、七十と夥しい數を追ひ廻して、どうして効果を擧げ得やう。一事に限る、一事に限る。先づ時間勵行なり、共同貯金なりを行るとすれば、役場も宣傳する、學校も宣傳する。いざその日、その時間といふ折には、寺院では鐘をついて人に知らせ、神社では太鼓をたゝいて村民を促す。軍人會なり青年團なりは、各會員の狩り出しでもやる。巡查も區長も町村會議員も之を應援するといふ位にやる。謂はゆる町村總動員の覺悟でやる。一事に全力、一事に集中、かくて一回二回三回と繰り返せば、後はだん／＼と樂になつて、命ぜらず

も行はれ、命令せずとも守られることになる。一つに成功して後他事に移る。次は酒杯の交換を禁止するなり、嫁入道具を制限するなり、行りよい事から段々とやり難い事に進んでゆく。かくていつの日か全部が完成する事になる。一事を貫く意志の力は、萬事を貫く意志の力也。この眞理は、個人に於ても、家庭に於ても、或は町村國家に於ても、聊かも變る所がない

七、貫行より慣行へ

全然個人的に行ふものは、自分が決めて自分が守るだけの事で、元より簡單容易であるが、若し之を前記の如く團體的共同的に實行するといふ場合には、その貫行事項が、一つの時と多くの時との兩者があり、且つ純個人的に比べて複雑である。例へば諸君の家庭で、本日より一事貫行を始めるとするに、食後には老人から子供まで、皆揃つて含嗽をさせうとか、朝起れば皆佛壇の前に座つて、祖先に禮拜させうとかいふ時に、之は家族全體に對して貫行事項の一つである。然るに、お爺さんお婆さんは、毎朝伊勢大廟を遙拜する、一事貫行、お父さんは禁酒、お母さんは日誌、お千代は讀書、太郎は體操、三郎は日曆を一枚づゝめくることの一貫行といふ時

は、家族全體、一人漏れなく行るけれども、貫行事項は一つでなくて色々である。前者でもよい後者でもよい。家内全體が相談して、都合のよい方、必要な方を行ればよいのである。

學校等でも亦その通りである。小學校でも中學校でも、師範學校、農學校、商工學校、女學校でも、乃至は商店、官衙、工場、會社等に於ても、食前體操なり、冷水摩擦なり、伊勢大廟の遙拜なり、毎月若干の貯金なりを全員揃つて行ふてもよい。或は各人てんでに何かの一事を選択して、十人十色、百人百色、思ひ／＼に我劣らじと助けつ勵みつするのよい。要は一事である。貫行である。眞面目である。徹底である。辛いからとて恐れず臆せず、出来たからとて油断せず、慢心せず、根本を目ざし根柢を志して、敢行即貫行、貫行即貫行、而して貫行即無貫行となる所まで進まねばならぬ。

眞忠は忠を忘る念々たゞ忠、眞孝は孝を忘る念々たゞ孝、之が即ち徹底である。最後の成功である。孔子曰く、「七十にして己の欲する所に従つて矩を踰へず」と。之ぞ即ち人間究竟の理想、道德的人格の完成である。果樹ならば彼の人に尋ねよ、町村指導ならばこの人に教を乞へ、肺病ならば何々博士に診てもらへ、音楽ならば何々女史の演奏を聴けと人に言はるゝ様になれば、こ

れ即ち一學、一事、一業の徹底である。神の智恵、神の技能の人に顯はれた所である。微なりと雖も、小なりと雖も、愛する讀者よ、志ある同胞よ、一事の奥底まで、一事の徹底まで、とり／＼に適所を取つて、直ちに立つて猛進せよ。

第七章 一事貫行の百例

だが、何と云つても最後の問題は貫行である。以上、屢々述べ來つたところによつて我が一事貫行の主義精神はほゞ分つて貰へたであらうと思ふが、要は貫行の一點に存する。貫行のなきところ、毫もその効果や價値を發見出來ないであらう。然らば貴下は果して何事を自己の一事貫行として採擇せられんとしてゐらるか。數ある中の唯一つ、自己の性質上、體格上、職業上、最も適當と認むるもの只一つ、それは果して何であらう。いよくそれを決定すべきところまで進めて來た。それで私は、諸子が貫行の題目一つを選択する場合の便宜のために、次に實際に即した一事貫行の百例を掲げ、實行者の参考に供したいと考へる。

素よりその着手の箇所は各人まち／＼であるであらう。或者はまづ身體を強くするためのものもあらうし、又或る者は才能の練磨に向つて進むものもあるに相違ない。或は又善の修業に向ふもの、富の蓄積に志すもの、その行き方は多種多様であらう。もつと根本的に云へば、消極的に行くか、積極的に出るか、それからしてすでに問題であるに相違ないが、何れにしても決定如何は自分自身にある。この場合、他人の良き結果を見習ふことも大いに有益の事である。然し盲目的に、他人があれをやるから自分もあれにしようでは面白くない。貴下には貴下の行くべき道がなければならぬ。境遇、性質、體質、職業上から考へて、貴下には貴下の探るべき一事が存する筈だ。よく／＼考へて、最も自己に適する一事を決定し、一たび決定した以上は、どこまでも勇進敢行して、この精神を自分の生命に役立て、欲しい。熟慮斷行！ それを切に諸君に希望する。

一、強の部

一、早寝早起

- 二、冷水浴又は冷水摩擦
(豫め時間を何時と定めて置くを可とす。)
- 三、毎朝体操
(國民体操、自強術、川合式強健術、ラジオ体操、西式強健法等、何れにても自己に適すると信ずるものを行へばよい。)
- 四、静坐若くは腹式呼吸
(なるべくは朝が良い。然し静坐などは夜間でも差支はない。)
- 五、毎朝冷水一杯を飲むこと
- 六、自分で床を上げ、或は掃除をすること
- 七、禁酒
- 八、禁煙
- 九、二食主義
(激しい労働をする人には、二食主義は困難であらう。しかし官吏教育者等には決して困難ではない)
- 一〇、間食を廢すること
- 一一、必ず飢えて食し、未だ飽かずしてやめること

- 一二、性慾を慎むこと
- 一三、寢床に入つて後は物を考へぬこと
- 一四、毎日必ず體育に關する書を読むこと
- 一五、健康日誌をつける、若しくは健康測定表を調製すること
- 一六、常に丹田に力を入れること
- 一七、襟巻手袋を用ひぬこと
- 一八、食物はよく咀嚼すること
- 一九、食後には口嗽をする事
- 二〇、毎晩寢る前に齒を磨く事
- 二一、徒歩主義（遠距離又は止むを得ざる事情の外は徒歩で用事をすまふこと）
- 二二、姿勢を正しく保つこと
- 二三、便通をよくすること
- 二四、其日の疲勞は其日に癒し、決して翌日に持越さぬこと
- 二五、熟睡安眠につとむること

二、能の部

- 一、其日の仕事は其日に處理すること
 - 二、明くる日の豫定は必ず前日の夕に定めて置くこと
 - 三、一週、一月、一年の年中行事、週間豫定表等を造つて、規律的に生活すること
 - 四、起床と同時に、仕事服を着ること
 - 五、作業中は雑談せず又喫煙せぬこと
 - 六、上長の命には、従順に服すること
 - 七、毎日（何十分以上、又は何頁づゝ）讀書すること
 - 八、書物はよく選擇して、必ず精讀すること
 - 九、日誌を記入すること
 - 一〇、整理整頓
 - 一一、即事實行
- （觀念即行爲にて、思ふと同時に實行すること）
- 一二、使用後、ペン、筆、農具類は洗滌して、定め場所に納め置くこと
 - 一三、自分の力で出来ぬと思ふ事は引受けぬこと
 - 一四、要務先辨のこと

- （他人を訪問しても、先づ要談より話すこと）
- 一五、手紙の返事はすぐ出すこと
- 一六、敢爲の精神を發揮して、先づ困難なる仕事に當ること
- 一七、一日一文
 - （或は一日に詩歌俳句の類を、幾らかづゝ作ること）
- 一八、家内的分業
 - （朝の仕事などを、家内手分けして、各人それ〴〵に手早く行ふこと）
- 一九、事務的精神を養ひ、事毎に能率増進を心掛くこと
- 二〇、一人一研究
 - （何事か自己に適する一事項に就き、毎日若干の研究をすること）
- 二一、信用を増進するに努むること
- 二二、改善録を備へて、改善事項の思ひつき及實施を記入すること
- 二三、念々油断なく、常に準備のしてあること
- 二四、常に注意深く何事をも觀察すること
- 二五、毎日一度は、必ず渾身の努力を注ぐこと

三、善の部

- 一、毎朝默座澄心すること
- 二、毎朝神佛に禮拜すること
- 二、日に何回か念佛を絶やさぬこと
- 四、毎日一回父母の許へ通信すること
- 五、父母の心を安んじ喜ばしむること
- 六、己の欲する所之を人に施し、己の欲せざる所之を人に施さぬこと
- 七、一日一善
 - （事柄の何たるを問はず、如何に些細の善行にてもよき故、一日に一つは、必ず慈悲仁愛の行をすること）
- 八、毎夕反省
- 九、修養日誌をつけること
- 一〇、己を責めて人を責めぬこと
- 一一、己の善を言はず、他人の悪を言はぬこと
- 一二、謙遜

- 一三、温顔を以て人に接すること
- 一四、汚穢醜行を避けて、聖潔純交を念とすべきこと
- 一五、如何なる場合にも怒らぬこと
- 一六、約束を違へぬこと
- 一七、虚言せぬこと
- 一八、毎日修養に關する書物を読むこと
- 一九、獨りを慎むこと
- 二〇、汽車汽船の昇降其他あらゆる場合に、老幼を先にし、之を助けること
- 二一、毎夜感謝の念を捧げて就眠すること
- 二二、食膳に向つては、禮拜して箸をとること
- 二四、嫉妬美望の念を起さぬこと
- 二四、聞かれて困ることは言はず、見られて困ることは書かぬこと
- 二五、名利の念を超越して仕事をなすこと

四、富の部

- 一、豫算表を造つて、計畫的に生活すること

- 二、毎月(又は毎日、毎半季等に)必ず一定の天引貯金をすること
- 三、時間、金錢、精力の三者を浪費せぬこと
- 四、病氣に罹らぬ様注意し、罹れば輕き中に直すこと
- 五、金錢出入簿をつけること
- 六、不要物は、たとひ安くとも買はぬこと
- 七、無闇に交際を擴張せぬこと
- 八、満を持して放たず、物にも心にも常に餘裕を存すること
- 九、平素細物を着せぬこと
- 一〇、頭髮を丸刈にすること
- 一一、物品の破損は早く修繕すること
- 一二、禁酒貯金、禁煙貯金をすること
- 一三、副業貯金、内職貯金をすること
- 一四、増俸貯金、健康貯金をすること
- 一五、子弟教育貯金、嫁入貯金をすること
- 一六、廢物利用貯金、節約貯金をすること
- 一七、宴會には止むを得ざるもの外、可成出席せず、二次會は如何なるものも、斷じて出席せざること

- 一八、笑ふ門には福来る、家庭の平和に心掛くこと
- 一九、借金をせぬこと
- 二〇、簡易生活、安價生活をなすこと
- 二一、子供の勤勞に對しては一定の報酬を與へ、之を貯蓄せしむること
- 二二、家に大金を置かぬこと、身に大金をつけぬこと
- 二三、流行を追はず、投機事業に手を出さぬこと
- 二四、獨立獨行、決して依頼心を起さぬこと
- 二五、毎日必らず消費以上の生産を心掛くこと

第八章 一事貫行の人々

期する所は實行に在る。詮する所は實踐の効果を擧ぐるにある。故に吾人は、諸君が我等の主張を實踐躬行して下さる爲の便宜に供したい目的から、前章に於て、一事貫行の百例を選んだが、更に本章には勇敢壯烈なる模範貫行の實例を掲げて、諸君の發奮を促さうとするのである。志

ある人々は、どうか之等先人の跡に見て、貴下の執らるゝ一事貫行に猛進されん事を望む。たとひ其性質事柄は異り、その境遇は同じからざるにもせよ、此處に掲ぐる先人苦心の跡は、我々にとつて力であり糧である。彼等が總て善いと知つては力めて之を行ひ、而も一と度着手した以上は、徹頭徹尾、直進獨行して、百難千險を越え、完成するまで決して當初の大決心を翻へさなかつた大意力こそは、誠に萬人の模範である。明治天皇に、

神葉にかけし鏡をかゞみにて人も心を磨けとぞおもふ

といふ御製があつたが、次に掲ぐる實例は、即ち神葉にかけし鏡であつて、讀者の絶えざる發奮劑として、その一つ一つが無限の味ひを有するであらうことを信ずる。

一、一筆書寫行人

現今、筑前國宗像郡田島村の興聖寺に一人一筆の大藏經なるものが傳へられてゐる。元來此の大藏經は、同じ村の宗像神社に保存せられてゐたものであるが、明治維新の後、神佛分離の令が出づるに及んで、之を宗像神社より引離して前記の興聖寺に移したものである。

そもくこの大藏經と云ふのは、佛敎々典のあらゆる種類が網羅してあつて浩瀚なること、實に驚くばかり、唐版、宋版、高麗版等、版の相違によつて、多少その卷數を異にしてゐるが、何れも五千卷六千卷八千卷といふ尨大なもので、謂はゆる汗牛充棟も嘗ならず、一人で之を書寫するが如きは、常人の到底なし能はざる所である。嘗て傑僧傳敎大師が叡山を開いて延曆寺を建立するや、せひとも此の大藏經を叡山に備へたいと志し、當時奈良の某寺にあつて大藏經を書寫せんと思ひ立つたけれども、一人二人の力では、到底この大業を遂ぐべからざるを知り、願文を認めて衆人に乞ひ、僅か一卷づゝでもよいから、廣く志ある人々の手助を願ひたいと天下に訴へ、かくて奈良七佛寺の僧侶達を始め、多くの人々の援助を俟つて、漸く完成したといふ程のものである。

然るに筑前國にある此の大藏經は、只一人の努力によつて書寫せられたものであつて、驚くべき信仰と精力との結晶物である。そもくこの驚くべき信仰と精神との持主は誰であつたかといふに、其は今(昭和十一年)を去る七百四十餘年の昔、前記宗像神社の社僧であつたところの、色定法師と呼ぶその人である。姓は佐伯氏、父は矢張この神社の社僧で、母は藤原氏の出であると

言はれてゐる。

さてこの色定法師の書き寫したる大藏經の原本は、唐版の物らしく、その卷數の五千〇四十八卷といふのは、唐版の卷數に符合してゐる。この法師、嘗て「法華四功德」なるものを讀んで、その中の一つに寫經の功德の有ることを知つてから、奮然として大藏經書き寫しの志を起し、昭和十一年を去る七百四十餘年前、時は安徳天皇が長門の壇の浦で、悲惨の最後をお遂げになつてより後三年目、丁度色定法師が年二十九の四月より書き初めて、以後年を経ること四十二年の長き間、絶えて之を廢することなく、後堀河天皇の安貞元年、鎌倉は源氏三代全く滅びて、京都から迎へられた征夷大將軍の頼朝時代、暮年七十にして漸く之を書き終つたのであつた。

いま其の大藏經の全部五千〇四十八卷を、滿四十二年を費して、平均に書き上げたものとして計算すれば、一ケ年約百二十二卷で、一ケ月約十二卷、十日にして四卷、三日にして約一卷を書寫しなければならず、而もそれが四十二年の永い間、寒暑風雨、盆正月の區別なく、一日も休みなしに持續した割合となるのである。試みにその四五卷をとつて全卷の字數を計算するに、一卷の字數平均約四千五百字、即ち一日平均千六百五十字となる。之をば四十二年間、只一日の間斷

もなく運寫したことになるのである。而も字體嚴正、一點一畫も苟くもせず、毎卷みな謹慎下筆、見る人をして襟を正しうせしむるのである。殊にこの四十二年間、法師は一地に滯居してゐたのではなく、東西南北、諸所方々を旅したのであるが、旅中と雖も筆墨を捨てしことなく、小机を首より吊して、歩むにも休むにも、又宿にても之を書寫し、終始一貫、勇往邁進遂にこの偉業を獨力以て成就したのであつた。その勇猛心はたゞく感嘆の外はない。

人やその性弱く、その志薄くして、多くは始あつて終なく、先は龍頭にして、末の蛇尾たるは世の常なるに拘らず、珍らしや色定法師の精根、前後四十二年を貫いて、露ばかり倦むことを知らなかつたのである。

今でこそ印刷の術が開けて、書寫の必要は無くなつたが、今から七百幾十年の昔では、書寫の事業は單に自分一人のみならず、社會的に大なる功德をなしたのである。而してこの色定法師の書寫したるものは、年を経るの久しき、或は蟲に食はれ、或は浸水に害はれて、多少汚缺を生じたが、而も尙七百年後の今日、四千餘卷を興聖寺に残して、精力絶倫の遺訓を末長く我國民に物語つてゐるのである。

二、木下中佐の洋燈掃除

駿州沼津の附近に「香貫」といふ所があり、此處に木下中佐と言つて、沙河の會戰で片脚を無くされた、大隈侯と同じ隻脚の方が居られる。私共は平生から此中佐とお心安く交際を願つてゐるが、非常に謹嚴質朴な、そして又温情溢るゝ許りのお方である。

名譽の負傷によつて軍隊を退かれた後も、何か身に叶ふ事に於て祖國の爲に盡したいとの御熱心で、田舎に這入つて少年團を組織されたのである。恐らく之が日本で一番最初の少年團であらうかと思ふ。今は衆望を擔ふて、この村の村長になつて居られるが、その木下中佐が、嘗て一事貫行の話をお聞き下さつて、善は急げの方針で、直ぐ之を採用せられたのであつた。

さて中佐は何を貫行せられたかと言ふと、其頃はまだ電燈がなく、香貫村は洋燈で事を辨じてゐた時であつたから、家庭の中で一番人の厭がる洋燈掃除を、一日缺かさず中佐自らされる事になつたのである。すると之を見られた奥様も黙つては居られない。不自由なる夫が洋燈掃除をして下さるならば、自分も何かやらなければならぬといふので、熟考の結果、平生夫の中佐が唱へ

て居られる事柄、即ち毎晩寝る前には、總ての物を一定の位置に整へて置くといふ、軍隊式の整頓法を實行されることになつた。すると又六つになる坊ちゃんや、お父さんやお母さんが一事貫行をされるなら、坊も何かしたいと言ふ。然し六つの子で毎日出来るやうなことは、一寸容易に見つからないが、遂に、それなら坊は毎晩寝る時に、日曆を削いで寝ることに定めやうといふので、木下家は家内揃つて、一事貫行の行者となられたのであつた。尙中佐は、やはり此の一事貫行主義でもつて、禁酒をも斷行せられたのである。若し誰か香貫村の木下中佐の家を訪問するならば、先づ其門口に、「自今禁酒」と書かれた木の札が、打ちつけてあることを發見するであらう。之れぞ即ち沙河の勇將貫行の猛者たる木下中佐が、「即時實行」の記念物である。

古語に、「徳孤ならず必ず隣あり」と言ふ如く、木下中佐一家の御美德は、程なく家門を出で、香貫村の青年に及び、或は自分の家の近くの道路を掃くとか、お宮お寺の境内を掃除するとかして、村は之が爲に著しく整頓する様になつたのである。老子曰く、

「上士は道を聞けば努めて之を行ひ、中士は道を聞けば存するが如く亡するが如く、下士は道を聞けば大に之を笑ふ」

と。木下中佐の如きは、實に老子の謂ふ上士たるお方であらう。

三、山内氏の禁酒

禁酒の事を述べるに當り、尙一人讀者に知らせたい人がある。それは山内利右衛門君と言つて岐阜縣土岐郡明世村の人である。名のみ聞くと老年らしいが、實は三十歳をまだ多くは越さぬ青年である。山内君の家は、祖先代々酒豪であつて、同君も若い時からこれを好み、既に病膏盲に入らんとしてゐる際であつた。丁度その時、岐阜縣第一回の地方改良講習會があつて、山内君は選ばれて其講習に出席したのであるが、酒飲む癖こそは有つたが、外に之ぞといふ缺點は無く、平素は至つて眞面目にして、且つ内心頗る熱に富んだ同君は、一事貫行の講演を聞いて、全く長夜の夢より醒めた様な心持、歸ると直ちに其旨を里人郷友に物語り、自分は「大正八年四月十八日、自己が第三十三回の誕辰を記念として、潔く酒を惡魔との交際を斷つたのであつた。其時に同君は左の如き一事貫行の誓を印刷して、知友の間に配つたのである。」

吾家累代酒と親しむ爲に、天命を全くせし者殆ど無しと言へり。乃父亦之が爲に其壽を保つ能はず、加ふるに予は幼時父の膝にありて、請ふが儘に杯を與へらる。長じて今日に及び、酒量彌々加はり、狂醉幾十回なるを知らず、膏に身を害へるのみならず、徳に悖り罪を構ふること多し。悔悟幾度禁酒を企つ。而して薄志遂に之を繼續することを得ざりし。

今春適々本縣第一回地方改良講習會の開催せらるるや、偉人山下先生來りて講演を擔任せらる。予親しく其教を受け、豁然として人生の意義を悟り、湧然として過去の罪禍を悔ゆ。茲に於て予は誕生第三十三回の記念日を以て禁酒の一事を貫行することを誓ふ。毀譽褒貶固より辭する所にあらず。冀くば辱知の諸彦微意を諒解し、援助を賜はらんことを。

大正八年四月十八日(第三十三回誕辰)

山内利右衛門

かくて山内君は、禁酒宣誓の烽火を擧げて立つたのであるが、當初は随分嘲笑罵詈の聲高く、一時は、其熱心を曲解し憎惡して、「氣狂」の渾名をさへ附けられた程であつた。然しながら「人

多ければ天に勝ち、天定まつて人に勝つ」とか言ふ通りで、遂に山内君の至誠人を動かして、續々禁酒會員の數を増し、今では「氣狂」所か、感心せぬ者は一人もなく、恐らく遠き將來に於ては、若き日の「氣狂」の渾名を變じて「聖人」の美名に換へるの時が有らうかと思はれる。

これらの我が同志は、東西南北の各地に在つて、孰れも主義の爲、道の爲に一時の恥を忍び、辱をも忘れて勇進健闘して呉れてゐるのである。若し我讀者の中、一人でも酒や煙草の外敵に圍まれてゐる人が有ならば、上にあげたる人々の勇氣に倣ひ、山内君の如き志士をば我兄とし、我友とし、又我鑑として、直ちに禁酒禁煙の斷行に着手して下さい。鐵は必ず赤き中に打たねばならぬ。好機は一度逸すれば、又何回でも巡り來るものではない。我が親愛なる同志よ、宜しくこの今日を捕へよ。決して明日ありと思ふ勿れ。

第九章 着手の箇所

一、撞かれる鐘

前八章に亘つて、私の述べた一事貫行の必要と、及び最後に掲げた模範的實例とは、大なり小なり、必ずや讀者の心を動かし、その胸奥に沁み込んだ事であらうと思ふ。高いと低い、強いと弱いととの相違はあつても、全然讀者の琴線に共鳴の響を發せざることは無かつたであらう。其の共鳴が大か小か、高いか低いか、強いか弱いかの差別は、打つ方よりも寧ろ打たるゝものの素質如何によるものである。

平素、熱心に自己改造を欲し、善美の行ひに進みたいと願つてゐた人々には、高く強き共鳴を喚び起したであらう。又之と反對に、克己向上の興味少く、奮闘努力に些かの注意しか拂つてゐなかつた人々には、極めて微弱な感觸を與へたに過ぎぬであらう。若し諸君にして、本書が呼び起した感奮興起の大小を反省せらるゝならば、之れやがて、自己の善心悪心の大小を計る度量衡たるであらう。凡そ講演でも著述でも、それが與へる効果の大小は主として讀む人次第、聽く人次第である。弱く響くも強く響くも、讀む人、聽く人の價値如何によるのである。撞く人の力の大小も、無論、音の大小に關係はあるが、それよりも寧ろ、打たれる鐘の良し悪しによつて、響の大小が生ずるのである。故に尊いのは、共鳴した人の心である。若し讀んで呉れる人に其要素

がなければ、幾ら論じても論しても仕方がない。之れ吾人が「唱ふるものよりも和する者は更に大なり」とする所以である。

吾人が各地に於ける一事貫行の講演は、非常の感謝感激を以て聽かれるのが通例である。恐らくはこの書も亦、幸ひにして講演同様に、多くの共鳴者を得た事であらうと思ふ。

「成程さうだ、其通りだ。我が行く道は定つた。要訣は分つた。之に従つて是非やらう。何でもかでも買いてみせう。」

と、竊に決心覺悟の胸を固められた人々も、決して少數ではないだらうと思ふ。

二、着手の時

凡そ、感激の其利那こそ一番に大切な時である。感奮のその折が尊いのである。鐵は必ず赤き中に打つべく、其機を逸してはならぬ。好機は何過も來るものではない。善いと知つたら一時も早く、直にその仕事にとり掛らねばならぬ。「知即動」「觀念即行爲」で、來月と言はず今月から明日を待たず只今から、即時即刻に着手しなければならぬのである。折角煙草を吸ふ人などが「此

一箱を吸ふてしまつてから止める」とか、酒を飲む人が、残りの酒を飲んでしまつてから禁酒する」とか言ふが、それでは未練が多過ぎる。かくの如くして、やらう／＼と思つてる中に、熱が冷めてしまふ、熱が冷めれば勇氣はなく、とう／＼斷行せずして終るやうな人が多いのである。前にあげた山内君の禁酒などは、此の誕生日から行ふたが、あれらは即時即刻に實行してゐて、たゞ世間に對する發表を、誕生日に延ばされた迄のことであらうと思ふ。熱慮斷行してもよい事だが、熱慮と未練とは同一でない。やるだけの勇氣が無くて、グズ／＼してゐるのは熱慮ではない。やる爲の選擇、やる爲の工夫、やる爲の考へが即ち熱慮でなければならぬ。

讀者にとつて、一番大切なのは今である。此書の最後の一章を讀み終る時の暫時である。まづ「讀み了へた。」と言つて、すぐ本を閉ぢて机の隅へ押しやるやうでは、讀んだだけの甲斐はない。「いゝ本を讀んだ、いざ我輩も何々をしよう」と、すぐ自己の實行事項を決定するのでなければ駄目である。諸君、願はくば其の一事を執れ。執つて以て有終の美を濟す所まで實行せよ。

三、實行の誓約

普通私共が、講習會に出席した場合には、一事貫行の講演を終ると共に、決心の出來た人々は直に「一事貫行の誓約書」といふものを書いて貰ふことにしてゐる。誓約書といふのは、「私は自己改造の第一歩として、必ず左の事項を實行いたします」といふ文章と共に、その人の姓名職業年齢と、その實行事項とを一枚の紙に書いたものである。無論、此の誓約は、紙には書くが、他人に誓約するのが主ではない。第一に神明に約束をするのである。第二には自分で自分に誓ふのである。我等は外部より、かゝる形式的の誓約を他人に強ひようとは思はない。強ひた所で効はない。すべて眞に徳を建て事を成す人は、自發的にやるのである。そして此自發的の人は、天に對して責任を感じるのである。たとへ他人を偽ることは出來ても、神と自己とは絶対に欺くことは出來ぬ。吾人の誓約は、須らくこの絶対に欺く能はざる者に向つてしなければならぬ。

尙一言こゝで注意して置きたいのは、永い間には、時々止むなき事柄が起る事もあらう。而してその止むなき事柄の爲に、一日なり暫らくなり、その實行事項を中止する事は、決して恥辱ではないのである。若し或人が、冷水浴の一事貫行を始めたならば、死ぬやうな病になつても、之

を中止してはならぬのだ等と思ふならば、それは誤りである。貫行は拘泥することではない。神も許し自己の良心も許す所の例外は、決して薄志弱行の罪咎ではないのである。親の危篤の場合には、讀書も静坐もあつたものではない。一事貫行は、そんな時にも無理強ひをしようとはせぬのである。一事貫行を一名無例外主義と言ふのは、自己の怠惰や、不熱心や、臆病から来る、一切の例外を許さぬといふ意味に外ならない。

四、點 取 表

さてかくしていよく決心が定まり、或は誓約書をも認めて、すでに、一事貫行の實行に取り掛れば、可成は「點取表」をつけるがよい。十分意志の強固な人には、誓約書も點取表も無用であるが、思ひの外に人間の意志は弱いもので、雄々しく立てた志が、途中で撓むこともあり、或は堅く貫く決心で居ながらも、ふとした不注意から、定めを破るといふやうなこともある。さうした時には、必ず他から之を諷めて呉れるだけのものがなければならぬ。この點取表は、即ちこの時に我を諷める師匠である。黒い丸は不注意と怠惰の證據であり、白

黒かねのまど射し人もあるものを貫き通せ大和魂

着手月日	昭和	年	月	日	計																																
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	合計						
月	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	合計

貫行事項

(執行の貫行) (貫行の貫行)

●星は行ひたるを表し
○星は行はざりしを表す

一事を貫く意志の力は萬事を貫く意志の力也

い丸は忠實勤勉の表示である。一日は一生の縮圖である。悪しき一日をつみ重ねて善き一生を得ることは不可能である。かくて此の一日此の一日の成績は、やがて驚くべく偉大なる成果を齎すことになるのである。

五、最後の勝利者

親愛なる讀者よ！最後に私がいよ／＼君に呼びかくべき時とはなつた。決心するのは今だ、着手するのは只今だ。運命の神は、いま、君の前に立ちはだかつて、君が右するか左するかをちつと眺めてゐる。はるかなる彼方には、光明の嶺と失望の谷底とが来る旅人を持ち構へて居る。今の一步、この一步こそ、やがてはその人の一生を支配する尊い一瞬だ。斷乎として決心し、猛然起つて着手せよ。君が新生の第一歩は實にそこから築かれよう。若しもこの好機を逸したならば、永劫に機會は歸つて来るものでない。

だがこゝで一寸注意すべき事は、徒らに功を急いではならぬといふことである。急いで仕事を仕損ずるとは世の弊だ。功を急ぐから飽くのである。功を急ぐから中途にして倒れるのである。

「蝸牛、そろ／＼登れ富士の山」

その調子、その調子、その調子で行かねばならぬ。腹を据え、氣を落ちつけて、悠々又堂々と行け、一步々々、しつかり大地を踏みしめて行く。「嶮山に登るには當初緩歩を要す」とはセキスビヤの言葉である。

又易经の中には、「天行健、君子自強して息まず」とある。

くろがねの射し人もあるものをつらぬきとほせ大和魂
とる棹の心ながくもこぎよせん蘆間の小舟さはりありとも

右は共に明治天皇の御製である。アダムの有せしところ、シーザーの成し得たるところは我等も亦之を有し、之を成し能ふ。たゞ必要なのは忍耐である。強意である。たとへ讀む人は多くても感激する人は少く、感動する人は多くとも、着手する人は少く、着手する人はよし多くとも十分を終る完ふする人は真に少い。實に残念なことである。人として苟くも志ある以上はそのやうなことで何とする。徒らに人生を悲觀する夢遊病者、なさずしてなし能はずとあきらむる無氣力者、弱者だけは永久に眠れ。我々は直ちに起つて實行に着手し、最後の勝利まで猛進する。

— 所 箇 の 手 着 —

讀んだだけでは効がない。感ただけでは能がない、必ず之を執り、之を守り、之を成し遂げなくてはならぬ。遂ぐることに、それが即ち勝利である。勝利を得よ、勝利を得よ、勝利の榮冠はよく忍びたる者の頭上にある。勝利の嶺に登る靴は強意である。諸君！直ちにやれ、いますぐやれ。腕競べではない根競べだ。理論じやない實行だ。一日、一日、あくまでも一事を貫け。無論大なり小なりの辛苦は伴ふであらう。がそれが何だ。どうせ辛苦は覺悟の前、水火も恐れず、白刃も辭せず、一生懸命に進め、堅實徐々に登れ。唱ふるお経は一事貫行、守る掟は一心不亂、修養の山、成功の嶺まで、いざ、只今より即刻出發せよ。

我々よりも先に進んだ先達はいくらもある。續く同行後進は無數である。道はとづくに開かれてゐるのだ。自愛せよ同志！奮起せよ同志！凱歌まで、最後の凱歌まで！さらば諸君！勇ましく登れ、いざさらば、諸君！

一事貫行(終)

昭和十一年十二月二十日印刷		昭和十一年十二月二十五日發行	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> <p>一事貫行</p> <p>定價一部十五錢</p> </div>			
著者	山 下 信 義	發行者	濱 田 壽 一
印刷者	安 藤 斯 郎	東京市中野區本町通五ノ一	
東京市神田區三輪町三ノ一四六		東京市神田區三輪町三ノ一四六	
發行所	東京市神田區丸の内三丁目九ノ内ビルヂング四六〇	對面	佐藤新興生活館
振替口座東京八四二五番		電話丸の内五〇九六番	

337
627

新興生活館出版圖書目錄

神原平八著・四六版上製三百頁・定價七拾錢（送料共）

標準生活の研究

我等如何に生きべきか、如何に家計をたて直すべきか、如何に生活を合理化すべきか、これら難問の解答は全部本書にある。これは誰にもすぐ役立つ合理的暮し方新讀本だ！

高良富子著・四六版上製二百頁・定價五拾錢（送料共）

子供の心の育て方

第一部子供の心の育て方、第二部母のための児童心理。前者はJ.O.A.Kから放送して天下の絶讃を拍した名講義、後者は婦人之友誌上に連載せる母のための親切な指導書！

中林保男著・四六版百八十餘頁・定價四拾錢（送料共）

皇國農民の行き方

著者は過去三年、三重縣囑託として縣下各地を行脚し、農家經營の實地指導に當りし人。疲弊と困憊にあへぐ皇國農民に、體驗を通して光明への道を明示せる書。

終

